

# 徳島大学渭水会々報

第43号

発行/徳島大学渭水会  
徳島大学総合科学部同窓会

題字：田中 双鶴 氏



「宇宙の琴線」／美浪恵利氏  
→関連記事P22

2014年11月発行

# 目次

会長就任のご挨拶 渭水会会長 石井 博	3
Topics 徳島大学開学140周年記念モノメント 「水の調べ」 寄贈	4
「水の調べ」について 鎌田 邦宏	5
総合科学部では今(25)	
地域連携プラザ「常三島けやきホール」竣工 大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部教授 石川 榮作(前研究部長 前学部長)	6
<b>特集</b> 新連載(1)	
私の職場 my workplace	
・カフェ開業において活かした学生時代の経験 織原 広平	8
・海外駐在(中国15年)における日中文化比較考察 山縣 秀明	10
・徳島市役所での仕事 田内 康之	12
・地域に根差して 廣井 和也	13
進路通信 ～求人票を送ってください～(1) 総合科学部就職委員長 桑原 恵	15
パターン認知の3階層処理 徳島大学名誉教授 濱田 治良	16
今描くべきものとは 美浪 恵利	22
連載⑤ Let's sports ヨット部って? 中野 太洋	24
連載⑤ 感動が人間を育てる ワーグナー・オペラとの出会い 大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部教授 石川 榮作	26
総科のおたから【其ノ式】 浅葱糸素懸威五枚胴具足	27
スタートライン	28
・感謝の学生生活 中畑 明理	
・徳島大学があつての今 阿部 沙紀	
・スタートラインで考える課題 福永 衣留	
・学部生から院生へのスタートラインに立って 本田 沙理	
・スタートラインから見えるもの 黒田 宙見	
【エッセイ】	32
・子育て中のひとりごと 三浦 由佳	
・草創期の恩師を偲んで 山田 秀雄	
【助成事業】	35
・徳大四小・中課程(昭和28年卒)第20回記念同窓会・講演会 井内 孝幸	
・高校・特別支援学校総会並びに講演会 部会長 飯田ひとみ	
・徳島市退職校長会講演会 宮北美恵子	
・小原繁先生・的場秀樹先生 退官記念講演会 幸田貴美子	
総科ニュース	46
徳大ニュース	49
編集後記	52



渭水会々長

いし い ひろし  
石井 博

## 新しい渭水会に向けて

このたび、平成26年度の総会で会長に選出されました石井博でございます。これまで本会の発展にご尽力されてこられました佐藤前会長をはじめ、多くの先輩のご努力を思いますときに、責任の重さを痛感いたしております。役員各位のご助力をいただき、微力ながら本会の発展に全力を尽くしたいと存じます。どうかよろしく願いいたします。

私は、昭和45年4月に徳島大学教育学部中学校教員養成課程に入学し、多くの先生方にご教示いただきました。

保健体育科に所属していましたが、縁あって2年生から彫刻のモデルをさせていただき、美術科の制作室にもたびたび寄らせていただきました。

このとき、同じようなポーズで「青年」「父の像」というテーマで、ほぼ同時期に2つの彫刻を制作されていましたが、4年生の時に両方の作品が完成いたしました。現在、後者は徳島中央公園に設置されております。現地で像を見るたびに、大学時代が懐かしく思い出されます。

また、保健体育の研究室では学生主体の自主的な勉強会を開き、様々なテーマのもと、教官に講師をお願いして体験談等、幅広く学ぶことができました。

教官の方々には、自主勉強会の講師を快く引き受けていただき、普段の授業ではなかなか聞けないような教師としての基本的な姿勢や在り方を教えていただきました。

さて、渭水会は、1874年（明治7年）徳島師範期成学校が創設され、それとともに発足した140年に余る長い歴史を誇る同窓会でございます。

これまでの長い歴史の中で、井内孝幸元会長、佐藤勉前会長、諸先輩方が営々と築かれてまいりましたすばらしい数々の業績がございます。

私は、新会長としてこのような成果をしっかりと継承しつつ、渭水会の会則第2章「本会は会員相互の友誼を永遠に保持し、会員と母校との連絡を密にし母校の発展に寄与することを目的とする」をふまえ、第3章にあります母校との連絡および母校の振興に関する事業であったり、会員の親睦、互助に関する事業に積極的に取り組み、より「渭水会」が充実発展するよう微力ながら誠心誠意努めてまいりたいと考えておりますので、会員の皆様方のご支援ご協力をよろしく願いいたします。

なお、本年度より総合科学部への支援活動の一環として、新たに学部生への表彰制度を新設することが、6月7日に行われました渭水会総会で決定いたしました。

これは、学業成績優秀で、研究活動及び学生としての活動全般について、模範となる優れた生徒を渭水会として表彰するものです。

このように、今後も、会員の皆様のご意見やご要望をお聞かせいただきながら、母校の発展に寄与する活動に積極的に取り組んでまいりたいと考えております。

また、長年、事務局長として勤めていただきました近藤様が退任され、新たに大井様に着任いただきました。そして、渭水会事務局の業務形態も大きく変更いたしました。詳しくは、巻末の事務局だよりをご覧ください、ご確認ください。

最後になりましたが、ご多用の中、2期にわたり「徳島大学渭水会」のためにご尽力いただきました前会長佐藤様をはじめ、関係各位の皆様方に心より御礼申し上げ就任のご挨拶といたします。

（昭和49年中学校課程保健体育科卒）

# Topics

## 徳島大学開学140周年記念モニュメント 「水の調べ」寄贈

このたび、徳島大学開学140周年を記念して、涓水会より彫刻「水の調べ」を寄贈することになりました。10月23日(木) 9時30分より、香川 征学長様はじめ大学からも多くのご参列をいただき、常三島けやきホール前にて除幕および贈呈式を開催。秋晴れのもと姿を表した大理石の女性像に、大きな拍手がわき起こりました。

作者の鎌田邦宏さん(二紀会会員)は徳島大学学芸学部の卒業生。作品の題名からは涓“水”会が容易にイメージされ、この作品が涓水の地に設置されることに運命的出会いを感じます。涓水会・総合科学部・徳島大学のシンボルとして末永く親しまれることを願っています。



「水の調べ」 素 材：大理石  
大き さ：H140cm、W50cm、D70cm  
笛 (ステンレス棒) 63cm  
重 量：約1t



左から毛利久康理事長、石井 博会長、作者の鎌田邦宏さん



いよいよ除幕！ 左から徳島大学の  
大橋 守評議員、平井松午学部長、  
香川 征学長、涓水会の石井 博会長、  
濱田治良副会長、河崎良行理事 (敬称略)



イタリアから取り寄せたという大理石。陽の光を受けて美しくきらめく



## 「水の調べ」について

かま だ くに ひろ  
鎌 田 邦 宏

「徳島大学開学140周年」という大きな記念の年に私の彫刻作品「水の調べ」を渭水会から徳島大学に寄贈して設置いただけることは、卒業生としても大変ありがたいことであり、光栄に思っております。

開学から140年という長い時間の積み重ねがあったということに大変驚くとともに、とても偉大なことと感じております。

大学在学中に初めて彫刻に取り組んだ時から先生や先輩方の制作される姿を見て、彫刻は時間を作品の中に入れ込んでいく作業の繰り返しで作っていくものだと思っておりました。この作品に時間の経過が十分内在する表現ができておればと存じます。

石彫に取り組むことになったときは、石の作品こそ彫刻の表現に最適なものだと思っておりました。今でもその気持ちは変わりませんが大作に取り組むには、いろいろな条件が整う必要があります。

石膏で高さが50cmほどの模型をモデルにポーズをしてもらって制作したエスキスをもとに、高さが140cmの大理石に拡大した立体の比率で工場の大型の石切鋸で石取りをしてから、私がダイヤモンドで1cm～2cmの幅で切り込みを入れてハンマーでたたいて削り取っていきました。根気のいる作業です。取りすぎると復元できないので常に緊張感を持って彫り進めました。石の高さの制限もあったのではじめから座像を彫るつもりで取りかかったのですが腕の部分が石の幅より20cmほどせり出すので継ぎ足すことにしました。

作品制作中、最も難しかったのがこの腕と手の角度でした。唇とフルーツが接するというふうになる部分に穴をあける作業で決めなければなりません。幸い石彫用ドリルで彫った穴の角度がうまくいってフルーツを吹かせることが出来ました。

女性がフルーツを吹くという形は、白い大理石の少し透明感のあるような質感の中でこそ表現できるものと思いました。

「水の調べ」という作品の題名は、水平面に置かれて、静かなメロディーを奏でている姿や、神山町の鮎喰川上流沿いにある石材工房で、グラインダー、ダイヤモンドやエアコンプレッサーによる突き鑿等の工具の使用法を教えてもらって、勤務していた学校の休日に自宅から片道30kmほどの道を車で通い7年ほどの期間をかけて仕上げたこと、川



に沿って道路があり、工房も川の近くにありましたので水の流れる音を聞きながら通い、制作をし、ときには河鹿蛙が鳴く声<sup>かじかがえる</sup>が聞こえることがあったということにも由来します。

いろいろな困難がありましたが、石材工房はじめ多くの方のご協力によって作品にすることができました。この度は母校である徳島大学に置いていただけるということで渭水会の皆様に衷心より感謝申し上げます。

(昭和39年中学校課程美術教室卒)

### 鎌 田 邦 宏

芸術活動は昭和38年徳島彫刻集団第1回野外彫刻展に出品。昭和40年第19回二紀展（東京都美術館）に彫刻作品が初入選、その後二紀展では佳作賞、二紀選抜展佳作賞、同人賞を経て現在は二紀会会員として二紀展（国立新美術館）に出品。昭和52年から徳島県美術展招待作家として彫刻作品を出品。

現在徳島県美術家協会理事。放美展審査員。二紀会会員。一般社団法人 二紀会徳島支部長。

### 作家歴

- 1942年 徳島県生まれ。
- 1964年 徳島大学学芸学部（美術）卒業
- 1965年 第19回二紀展初入選（東京都美術館）
- 1971年 第25回二紀展 佳作賞
- 1973年 二紀選抜展 佳作賞
- 1975年 第29回二紀展 同人推挙
- 1988年 第42回二紀展 同人賞
- 2002年 第55回二紀展 会員推挙
- 2003年 第56回二紀展会員  
個展、二紀会会員展出品
- 2004年 第57回二紀展会員出品以後毎年出品

## 地域連携プラザ「常三島けやきホール」竣工

大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

教授 石川 榮作（前研究部長 前学部長）



平成21年4月より2期4年間にわたり総合科学部長を務め、その間、学部・大学院の改組や1号館・2号館の改修については、これまでの渭水会々報において学部長挨拶や総科ニュースの欄で書かせていただきましたので、今回はその後の総合科学部のトピックスとして地域連携プラザ「常三島けやきホール」竣工についてご報告いたします。

この地域連携プラザ「常三島けやきホール」は、もともと平成23年度の2号館（旧音楽棟・美術棟）の改修に伴って、話が動き始めたものです。2号館の改修工事が決定した際、その改修は旧音楽棟と旧美術棟の単なる改修に終わるのではなく、両建物間に300名収容の大ホールを増築するなどして意味のあるものにしてほしいとの声があちこちから聞こえてきたのです。これまで1号館で最大の教室と言えば、せいぜい170名前後収容のもので、1学年定員265名の学部共通科目「キャリアプラン入門Ⅰ」の授業は、工学部K棟の大教室を借りて行っている有様でしたから、そのような声が強まってきたのも当然のことでした。しかし、増築となると、学内

予算になりますので、学長や役員会との交渉が必要になってきます。大学も年々予算が削減されていく中、とても無理ではないかと思いつつも、何度も香川学長のもとに出かけて、大ホールの必要性を訴え続けました。これが私の学部長在職期間中の最大の仕事だと思って、機会あるごとに学長をはじめ役員の方々をお願いを続けてきたところ、その根気強い願いが実って、増築を認めていただきましたが、それも学部長一人によるものではなく、最近特に総合科学部の各教員がそれぞれの分野で地域に貢献していることが認められたからだと思います。

そのように総合科学部を評価してくださる学長をはじめ役員会の御英断に報いるためにも、立派な大ホールを作り上げなくてはならないと思い、さっそく2号館増築ワーキンググループを立ち上げて、2号館全体の増築・改修プランの検討を開始しました。ワーキングメンバーにひんばんに集まってもらって検討の結果、大学本部の要望も盛り込んだかたちで、2号館全体を「地域連携プラザ」と称し、これを共同研究・地域連携の拠点として、地域文化を発信することで、地域の再生・活性化に貢献していくということにしました。こうして増築プランも決



地域連携プラザオープンのテープカット



常三島けやきホール

まりましたので、旧音楽棟の改修の際にはピアノ練習場だった部分を増築の一部に充てるため、そのままにしておくこととしました。平成24年3月に旧音楽棟と旧美術棟の改修が竣工すると、いよいよ次は2年かかりで増築部分の工事が始まりました。旧音楽棟のピアノ練習場と両建物の間にあった通路を使っての増築工事です。増築部分は2階建てで、1階には多目的室のほか展示スペースなどを設けることとし、2階は全体が待望の大ホールです。その増築部分の工事は予定どおり平成26年3月に竣工し、4月3日にはその地域連携プラザ竣工記念式典が挙行されました。学部長職を退いてから1年が経過していましたが、この増築竣工が学部長を務めていて一番うれしかったことであることは、言うまでもありません。

この増築部分の2階に設けられた大ホールは、愛称募集により、「常三島けやきホール」と名付けられ、総座席数293のうちホールの後ろ半分にあたる147席は電動式移動観覧席であり、数分間で片づけることもでき、前方のスタッキングチェア146席を自分たちの手で片づけると、大ホール全体は多目的ホールとしても利用できます。この大ホールのこけら落しの行事としては、5月21日に総合科学部卒業生でNHKドラマ『遙かなる絆』の原作者城戸久枝氏をお呼びして、昼間は1年生のために講演、夜間は徳島県日中友好協会との共催のかたちで「原作者を囲んでのトークと座談会」を開催しました。この大ホールは大人数の授業をはじめ各種講演会・学会のほか、さまざまなイベントを企画して地域の方々にも使っていただくために作ったものです。今後ともこの大ホールが大学関係者のみならず、地域の諸団体によっても大いに利用されることを期待しております。これからの時代においては地域とともに大学も一緒に成長していくところに、真の意味での「大学の発展」があります。総合科学部としましても、



開学140周年記念モニュメント除幕式



城戸久枝講演会

今後ともこの大ホールにおいてさまざまなイベントを企画・開催することによって、常三島キャンパスから地域文化を発信していきたいと思っています。なお、この地域連携プラザの2つの入口のうち、旧音楽棟の入口には涓水会からの寄贈により会員の鎌田邦宏氏（昭和39年中学校課程美術教室卒）の作品「水の調べ」（本会報第40号表紙、本号P4参照）を設置することになりました。旧音楽棟あるいは旧美術棟を思い起こさせるようなぴったりの作品で、地域連携プラザがますます光り輝くような印象を与えてくれます。卒業生の皆様にも機会がありましたら、是非、このように古きよき伝統を守りながらも常に前進を続ける新しい母校を訪問してくださいませよう、お願い申し上げて、「総合科学部では今」のご報告とさせていただきます。



寄贈された彫刻「水の調べ」（鎌田邦宏氏 作）

総合科学部が創立されて早や30年。国内外を問わず多方面の職場で活躍されている  
 学生会員の皆様に、職場の状況や特色、体験談など、その職場ならではのエピソード  
 を語っていただきました。

カフェ

## カフェ開業において活かした 学生時代の経験

おり ほん こう へい  
 織原広平

私事ではありますが、昨年の6月末に大学卒業してから約2年勤めた不動産会社を退職し、この4月に徳島市山城西にて「chu chu churros cafe 沖浜店」という名のカフェをオープンさせることができました。今回は「職場について」とのことなので、僭越ながら店の簡単な紹介と開業において大学時代の経験を活かすことができたエピソードを述べさせていただきます。

まず簡単に当店の説明をさせて頂くと、当店は徳島市東新町商店街に店を構える「chu chu churros

cafe」の初FC店です（経営は独立しております）。業務内容としては「チュロス」というスペインの伝統的な洋菓子の提供をメインとするカフェであります。この「チュロス」という商材は最近、大型ファーストフード店や大手コンビニでも取り扱いが始まりましたが、専門店と言うと日本でも非常に少なく、まだまだ今後の開拓が見込める商材と言えます。特に当店のチュロスは、通常、生地には小麦粉を使うところを徳島県産の米粉を使用し、更に和三盆糖や藻塩などを使用した地産地消に拘った製品であり、従来のチュロスとの明確な差別化ができています。更に米粉を使用することによって、通常のチュロスとは全く違った「外はカリッと、中はモチモチ」というような食感や味となり、通常のチュロスが苦手と言う人でも食べることができるようになっています。また、小麦粉が不使用であることより、小麦アレルギーのために通常のチュロスは食べられないという人でも食べられるようになっています。

元々、東新町の本店（以下、本店）がある程度の知名度を持っていたことにより、当店も開店当初より多くの方に来て頂け、有難いことに開店から数か月経った現在も多くの方にご利用を頂いております。

さて、ひとまず、簡単にですが当店の説明をさせて頂いたところで、今回の開業にあたって自身の中で大学時代の経験を活かすことのできたエピソードの一つ上げさせて頂きたいと思います。

今回、開業すると決めたのは良いものの、現実問題として「資金の調達」という壁が立ちふさがりました。退職当時、約2年勤務をしていたため多少の





白と木目を基調にした明るい店内

貯蓄はあったものの、開業資金としてはとても足りるようなものではありませんでした。そこで日本政策金融公庫からの融資で開業資金を賄おうと考えました。

この融資を受けることに関して調べてみると、多くの提出書類にしっかりと記入をした上でも通るのは難しいとのこと（開業なので少しハードル自体は低いとのことでしたが）。そこで少しでも通る可能性を上げるために、様々な部分において客観的事実に基づく根拠を持たせ、それがかつての卒業論文のように文章にして提出しようと考えました（補足資料としての提出で、必要提出書類ではありません）。

私が所属していた「臨床心理学研究室」で初めに教わったのは、「述べている内容」に対して本などから「事実となるべき根拠」を集めてきて、「〇〇ではこう言っているからこそ、今回の結果は××であった」という論文を書く上での論理的な文章の組み立て方でした。この書き方を学べたことは、卒業論文のみならず後々の私の文書作成において非常に有益であったと思っています。もちろん、今回の日本政策金融公庫への提出書類作成において、この書き方と卒業論文作成の経験を活かすことができ、自分でも納得の文書を作ることができました。

日本政策金融公庫の融資では、書類を事前に提出し、後日、担当官と面接という流れになっています。様々な経験者の話をインターネットで調べてみると、この面接では様々なことを深く追求されるとのことです。私もかなり緊張しつつ面接に臨みました。が、私の時は簡単な確認ばかりで踏み込んだ質問と



チュロスは1本180円～。  
シュガー、シナモン、阿波和三盆など7種の味がある

いうのはほとんどありませんでした。これも、作成した文書において「これでもか！」と言わんばかりに細かい所まで説明し、更に客観的事実に基づいて



注文を受けてから1本ずつ調理する

根拠を述べたことが功を奏しており、実際に面接官もそのようなことを言っていました。

以上のことが、私が大学時代に学んだことを今回の開業において活かすことができた、というエピソードの一つです。

各学科や各研究室において、全く学ぶ内容も異なると思いますし、後々に活かすことのできることも違ってくると思います。ただ、私は臨床心理学研究室に所属することができ、「客観的事実に基づく論理的な文章の組み立て方」を学び、卒業論文作成を通して論理的思考を少しでも身に付けられたことは、自らの人生において非常に有益であると思っています。

「卒業論文作成は、ただ単位のためではなく、今後の人生において必要となる論理的思考を身に付けるためにも非常に重要な事項である」という考えのもと、私のような者を熱心にご指導頂いた内海千種准教授に感謝の意を示し、本文を締めさせて頂きたいと思います。

(平成23年人間社会学科人間行動コース卒)



### INFORMATION chu chu churros cafe 沖浜店

〒770-8054 住所：徳島市山城西2-17 1F

TEL/FAX：088-624-9448

営業時間：11時～20時 定休日：不定休

駐車場：近隣Pにて4台分あり

<https://ja-jp.facebook.com/chuchuchurroscafe.okinohama>

# 海外駐在（中国15年）における 日中文化比較考察

やま がた ひで あき  
山 縣 秀 明

私は現在、中国江蘇省蘇州市という街に日本本社から駐在員として派遣され、メーカーや商社の輸出入業務をお手伝いしております。役職としては、青島関光国際物流有限公司蘇州分公司（日本側：SHKライン／関光汽船株式会社）の総経理、つまり現地法人社長となります。

仕事の内容を簡単に紹介しますと、日中間の工場から工場まで（専門用語では Door To Door）の貨物輸送に関するあらゆる業務をお客様に代わって対応するもので、具体的にはトラック手配、倉庫作業、港湾作業、税関等手続、海上輸送の手配、各現場での立会いを行なうものです。

例えば日本で皆さんが買われている食材、衣類、電子機器…。日本から材料や生産設備を輸入し、製品を日本に輸出しているケースが大変多く、特に衣類や電子機器は発注から納品まで短期間対応（最短記録は2週間）で輸出入を行なっている為、都度スピーディーかつ安全な作業、手続が要求されます。

中国、日本ともに仕事の内容は殆ど変わりませんが、現地の言葉や習慣を考慮しないと円滑な対応はできません。一番驚いたのは根本的な発想の相違。全体的なイメージですが、「緻密な計画で行動する日本人」と「終わり良ければ全て良し…の中国人」。

なにしろ法律ですら多くが施行後数日たって公表され、しかも全国一斉即日実施ではなく、中央（北京）～重点都市（上海等）～地方都市まで数か月かけて適用されるお国柄。地方都市で法律が適用される頃には中央では改正が行われていたりもする中、なかには改正が一体何を意味するのか専門家にすら不明なまま「適用」されていたりもします。



それゆえ一般論ですが、国民は政府すら信じようがない～「困ったときは人脈で解決」という習慣が根強く残っているのだらうと思います。

他にも多くの点で発想や習慣は異なります。単純に人口を比較しても中国人は日本人の10倍です。何が起きても動じない心の準備がないと、とても耐えきれない現実の連続。例えば、中国政府は旧正月（春節／農曆1月1日）と建国記念（国慶節／10月1日）を国の重要休暇と定め、7連休を各政府機関や企業に求めています。期間中移動人口は中国全土で数億規模、特に旧正月は「お金がなくても精いっぱいの手土産を持って期間中帰省」しないと親戚一同からひんしゆくを買うお国柄。列車のチケットは当然予約開始と同時に売切れ、地方都市出身が大部分を占める都市部では恐らく日本の盆正月が一度に2回来たような人と荷物の山。そして「チケットが取れないので」連休前に休暇を開始、連休後に職場に戻る…こんな光景が毎年の恒例行事で、トラック手配や手続対応も人不足で大変な状況になります。

こちらでは「小さな村」でさえ人口は数十万人。移動距離数百 km は「近い」という感覚。私のこれまでの経験上、一番遠かった輸送は片道3,000km。

現地スタッフの反応は拍子抜けするくらい淡々と対応していました。

経済面では「中国はワープロを飛び越え、急にタイプライターからパソコンになった国」。この言葉、他の分野でも非常に深い意味を持つ興味深い言葉だと思います。

新しいモノ好きの国民性？と70年代以降の急激な経済改革、そしてインフラ整備の遅れという現実から、固定電話やテレビの家庭普及率は低いのに、携帯電話やネットテレビは90年代中旬には浸透。特にネットの発展は目覚ましく、仕事でチャット利用は当たり前。中国のチャットソフトは容量が何メガもある書類ですら瞬時に送受信可能。私がメールの送受信で苦戦している姿は、スタッフにとっては信じられない現象なのです。学校の先生・父兄・生徒間の連絡は全てチャットソフトを使用するよう指示されているほどですので、その品質と信用は絶大なものなのでしょう。

文化面では、蘇州は世界遺産にも認定されている「園林」と呼ばれる、昔の富豪が別荘として建てた庭園が10か所、他に京劇の原点となった「昆曲」と呼ばれる歌劇舞台、更には鍾乳洞もあり、週末の息抜きには最高の観光地ですが、それら観光地から数百mも離れていない場所には高層ビルや工業地帯が林立し、バイクタクシーや人力車とタクシー、新幹線が同じ空間に存在しています。食事は昔ながらの一食100円前後の定食屋の傍にケンタッキー、ココ壺カレー等外資系。商店もイオングループ等の高級デパートやセブンイレブンの傍に昔ながらの露天商。新旧混在でありながら、そのどれもがエネルギーに動いている姿に、たくましさを感じます。

紙面が残り少なくなりました。写真を何枚か添付いたします。

私の拙い文章力では表現しきれない文化の相違、スケールの大きさをお楽しみ頂けると幸いです。

(平成2年総合科学科文化コース・ピークII 芸術研究卒)

## 蘇州ってこんなところ



美しい庭園「園林」



“東洋のベニス”と呼ばれる蘇州



バイクタクシー



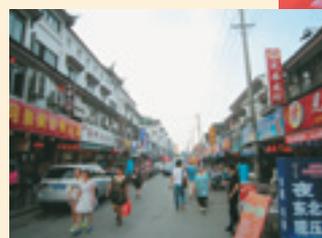
オフィス街



蘇州駅。これ、普通の平日の姿です



庶民の定食 1食100円



庶民の街並み

# 徳島市役所での仕事

た　　うち　　やす　　ゆき  
田　内　康　之

私は、平成5年4月1日に徳島市役所に就職し、今年度で在職22年目となりました。

「渭水会々報」には、就職して2年目の平成6年、当時所属していました「ながいき課での仕事」について投稿させていただきました。

早いものであれから20年経過し、今回また「私の職場」ということで投稿の機会をいただきましたので、これまでの市役所での職歴及び現在の職場について書かせていただきたいと思います。

まず、1年目の平成5年度、研修期間の4～6月については、保険年金課において老人医療に係る業務に携わり、その後平成5年7月1日付の機構改革により新設されたながいき課に配属され、「徳島市老人保健福祉計画」の策定業務等を担当しました。

次に、平成7年4月1日付で住宅課に異動となり、6年間在籍しました。

住宅課の1年目（平成7年度）は、庶務係として課の庶務や経理を担当しましたが、あとの5年間は、管理係として住宅使用料（家賃）の徴収等の業務を担当しました。

特に私の在籍中には、根拠法令である「公営住宅法」の改正があり、住宅使用料の算定方法が変更されるということで、市役所で使用している「市営住宅管理システム」の改修や法改正について入居者への周知を行いました。

住宅課在籍後、平成13～18年度は、徳島市生涯福祉センター（ふれあい健康館）に配属されました。

ふれあい健康館は、市民一人ひとりの「体の健康」、「心の健康（生涯学習）」、「暮らしの健康（福祉）」の3つの健康づくりを総合的に推進していく目的で、平成13年11月13日に開館しました。

開館前は館の運営に必要な備品の購入等の準備業務を、また開館後においては、各種講座の運営や施



設管理業務を担当しました。

平成19年度からふれあい健康館に「指定管理者制度」が導入されることとなり、市役所本庁において指定管理に係る業務に携わるとともに、平成19年度は、ながいき課に

おいて高齢者福祉に関する業務、平成20～21年度は、保健福祉総務課（現 保健福祉政策課）において保育所の指導監査や、社会福祉協議会、民生委員・児童委員に関する業務等を担当しました。

また、平成22年度からの4年間は、職員厚生課安全衛生担当（専任衛生管理者）として、労働安全衛生法に基づく安全衛生委員会や、衛生管理者免許所持者等に対する研修会を開催し、職員の健康の保持・増進や快適な職場環境の形成、公務災害の防止を図る業務に携わりました。

そして、今年度（平成26年度）から選挙管理委員会事務局に異動となり、現在、事務局の庶務と選挙啓発を担当しています。

平成27年4月には、4年に1度の統一地方選挙（徳島県知事選挙・徳島県議会議員選挙・徳島市議会議員選挙）が執行されることは知っていましたので、この1年間は、選挙管理委員会事務局の仕事の流れを覚えるのに十分時間があると思っていました。

ところが、ゴールデンウィーク前になって、徳島県議会議員（徳島選挙区）において欠員が2人となったため、「補欠選挙」が執行されることとなった



徳島市役所

との連絡が徳島県選挙管理委員会からあり、その日から補欠選挙に向けた準備が始まりました。

まず、選挙執行のためには予算が必要ですので、私は庶務担当として補正予算を編成することから始め、予算執行が認められた後は、それぞれの担当において、告示日までは投票所の使用依頼や投・開票事務従事者への依頼、期日前投票所の設営等選挙に向けた準備、告示後は期日前投票所の開設や街頭啓発等が行われました。

そして、選挙の投・開票日当日。私は速報担当として、投票時間内は、選挙管理委員会事務局において各投票所からあらかじめ決められた時間に送信される投票状況を、また開票所においては、開票状況

を取りまとめ、徳島県選挙管理委員会等へ報告を行いました。

これまで選挙当日の投・開票事務従事者として選挙事務には関わっていましたが、今回の補欠選挙を経験して、選挙執行における業務量の膨大さを感じました。

市役所においては、人事異動により部署が変われば、仕事内容も大きく変わります。私自身、これまで担当した部署は数か所であり、まだ経験していない業務も多くありますが、今後とも徳島市職員として市民の皆さんのために勤めてまいりたいと思います。

(平成5年総合科学科文化コース・ピークI卒)



## 地域に根差して

ひろ い かず や  
廣 井 和 也

私は一般社団法人・徳島新聞社で記者をしています。県内各地の身近な話題を扱う「地方部」に所属し、現在は鳴門市撫養町にある鳴門支局が私の職場です。徳島新聞社が県内13カ所に設ける取材拠点の一つで、私と後輩記者の2人体制で取材活動に取り組んでいます。

支局は地域に根差し、新聞社の前線基地といえます。取材対象も幅広く、担当地域で起こる事件や事故をはじめ、自然災害や行政、教育、文化、地域のイベントなど様々な分野の話題をほぼ一手に引き受けます。ネタを探しに関係機関を回ったり、支局に届く広報資料を基に取材したりしながら地元のニュースを発信しています。鳴門支局の担当エリアは鳴門市ですが、複数の自治体を受け持つ支局もあり、例えば板野支局は板野、上板、藍住の3町を担当しています。

事件や事故などの発生事案に備えるため、普段は支局内の住居スペースに寝泊まりしています。深夜に聞こえてきた消防車のサイレンの音に目覚め、現場へ駆け付けることも度々あります。機動力を生かした現場取材が支局の要ですが、朝晩気の休まることのない生活は正直、社歴を重ねても慣れるものでもありません。もともと記者という仕事に定時の出勤はあってないようなものといいますが、そのことを実感しています。

私が鳴門支局に配属されたのは今年4月。赴任先として当時の上司から聞かされた時は、渦潮に鳴門わかめ、なんと金時、レンコン、ナシ、大麻比古神社、霊山寺…と名所や特産が次々と頭に浮かんでき



ましたが、土地勘の方はさっぱり。着任当初は一刻を争う火災の発生現場で「向かう場所の地名は木津だったか大津だったか」とカーナビゲーショと住宅地図を頼りに周辺をぐるぐる迷い続けていました。今は、市内に「亀浦港」と「亀浦漁港」と「亀浦観光港」がそれぞれ別の場所にあることぐらいは分かるようになりました。

地方紙の記者として、支局ほど魅力的な職場はないと思います。平成11年に入社してすぐに記者となり、16年目。中でも平成14年から計5年間勤めた阿

南、日和佐（現・美波）の2支局では貴重な経験ができました。まだまだ駆け出しの頃、ちょうど「平成の大合併」の議論が真っ盛りで、まさに地域の在り方が問われた時期でした。財政難にあえぐ町同士が合併特例債にすぎたものの、地域性の違いで協議の破綻を繰り返したり、新しい町の誕生で歴史ある地名が消えたりするのを目の当たりにし、「わがまち」とは何か、行政、住民への取材を続けることで多方面から考えさせられました。節目ごとのニュース原稿に加え、自分の思いを文章に込めたコラムや連載を書いた時の苦労や悩みが、今の自分の基礎を作ったのではと感じています。

というのも、私は徳島に生まれ、徳島大学を出て、徳島新聞社に勤めるという地元志向の塊のような人間ですが、同じ徳島の中でも、やはり地域ごとに固有の風土や歴史、文化があり、そこで暮らしてはじめて気付くことばかりだと肌で感じるからです。「わがまち」として課題を掘り下げ、今後の行方を真剣に考え、報道するうちに、その地域に自ずと愛着がわいてきます。鳴門市にも少しずつ、愛着がわいて

きています。ただ自分が地域にとって顔の見える記者になれているかどうかという点では、まだまだ努力が足りず、今のところ反省しかありません。市民のためになり、面白い記事をどんどん書かなければと思います。

在学中は教員を目指し、教員免許を取得した自分がまさか新聞記者になろうとは、その時は思ってもみませんでした。しかし新聞を毎日読むうちに「こうした情報はどこからきて、どのようにして伝えられているのだろう」という素朴な興味から、今の会社の門をたたきました。少子化やデジタルメディアの普及などを背景に、新聞業界全体の先行きに不透明感が増しています。ビジネスモデルとしての新聞は、時代のニーズに対応しようと模索しているところですが、記者という仕事は、その地域に人が住み、人と人がつながる限り、大きく形が変わることはありません。そこに住む人の息づかいが読者に伝わる記事を書いていきたいと思っています。

（平成9年人間社会学科国際経済社会システムコース卒）

（平成11年人間・自然環境研究科人間環境専攻修了）



それぞれの職場での活躍が目につかぶ  
ご寄稿、ありがとうございました！

次号より連載でご紹介していきますので、どうぞご期待ください。

皆様からのご寄稿、ご紹介もお待ちしております。

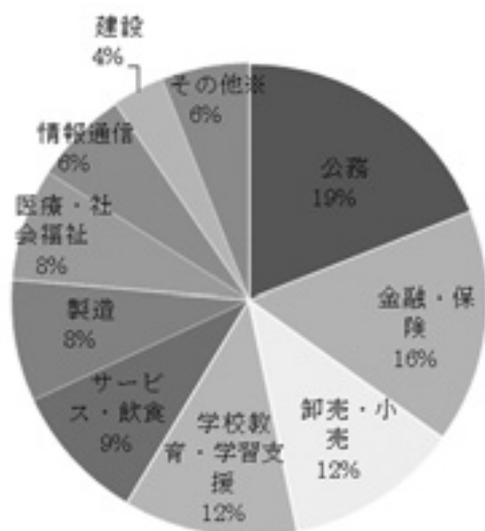
# 進路通信

～求人票を送付ください～

## 総合科学部の就職状況

就職委員長 桑原 恵

総合科学部を平成26年3月に卒業した学生の就職内定率は94.9%とほぼ全国平均並です。下のグラフでも明らかなように、本学部の学生の進路としては、公務員や教員への就職を希望する学生がかなり多くおります。ここ数年は、数学や理科を中心に、教員への現役合格者も10名程度出ており、公務員への合格者も多く出ています。



一般企業への就職については、特に業種や職種に偏ることなく、様々な業種の企業へ就職しています。県内企業の採用担当の方からも、総合科学部生を過去に採用した経験を踏まえて、是非今年度もとのお申し出を頂くことも多くあります。県外の企業からも同様のお申し出を頂くことも多く、先般の日経新聞紙上における徳島大学総合科学部生に対する評価の高さは、このような所にも表れていると言えるでしょう。また、本学部は県外出身の学生が多いこともあって、県内での就職希望者が60名程度とかなり少ないという傾向にあります。県内の企業など勤務地を徳島とする採用のお申し出を頂いても、希望する学生がいないということも生じています。

総合科学部の諸先輩は実に多くの企業で活躍しておられます。学生達には、そのような先輩のご指導の下で活躍して欲しいと願っております。先輩方で、後輩を職場に迎えたいとお考えの皆様には、総合科学部生を対象とした求人票を下記のメールアドレスに送付していただければ幸いです。

今後とも本学部と学部生へのご支援をお願い致します。

徳島大学キャリア支援室 E-Mail [gkseisyu@tokushima-u.ac.jp](mailto:gkseisyu@tokushima-u.ac.jp)

TEL 088-656-7635

# パターン認知の3階層処理

徳島大学名誉教授 **濱田治良**



## 1. はじめに

普通、日本の家紋は円形輪郭の中に描かれ、特殊なものを加えるとその種類は数千に達し日本の単位模様の大部分を含むと言われています。そして日本の伝統文化が蓄積してきた家紋の理想的形態は、簡単な幾何学的図形であって何らかの対称性をもつとされています。そこで数学の群論で扱う幾何学的対称性を明示するために、本稿で問題にする回転対称と鏡映対称を有する日本の家紋の例、8種類を図1に示します。

ここで鏡映軸（対称軸）をもたず家紋の中心軸を固定して、その回りを回転させた場合に家紋が変わらず不変性を示す回転変換の集合は巡回群（Cyclic group）です。これらの家紋は $360^\circ/n$ 回転の $n$ 個の回転変換に対して不変性を示し $C_n$ と表現され、変換の個数は $n$ です（ $n = 4, 3, 2, 1$ ）。例えば図1において $C_4$ と記されている「五つ割まんじ」は中心軸の回りを $90^\circ$ 単位で4回転しても図形は変わらず不変性を示すので、変換の個数は4です。また $C_1$ と記されている「光琳舞鶴」は $360^\circ$ の1回転にしか不変性を示さないなので、変換の個数は1です。

一方、家紋の中心を通る $n$ 本の鏡映軸（対称軸）に対して表と裏を裏返した場合に家紋が変わらず不変性を示す鏡映変換と $n$ 個の回転に対して不変性を示す回転変換の集合は二面体群（Dihedral group）です。これらの家紋は $n$ 個の鏡映変換と $n$ 個の回転変換に対して不変性を示し $D_n$ と表現され、変換の個数は $2n$ です（ $n = 4, 3, 2, 1$ ）。例えば図1において $D_4$ と記されている「四方千切」は家紋の中心を通る4本の鏡映軸（垂直・水平・ $\pm 45^\circ$ ）に対して不変性を示すと同時に $90^\circ$ 単位の4回転に対しても不変性を示すので、変換の個数は合計で8です。また $D_1$ と記されている「庵」は1本の鏡映軸（垂直）に対して不変性を示すと同時に $360^\circ$ の1回転に対して不変性を示すので、変換の個数は合計で2です。

90°回転		120°回転		180°回転		360°回転	
$D_4$	$C_4$	$D_3$	$C_3$	$D_2$	$C_2$	$D_1$	$C_1$
四方千切	五つ割まんじ	三つ柏	三つ巴	分銅	亀甲にトの字	庵	光琳舞鶴

図1 日本の家紋の8つの例と対称変換群。(濱田ら、2011より)

ここで巡回とは家紋の中心軸の回りを回転させることを意味し、二面体は表と裏の二面を意味します。そして $n$ は巡回群では回転の個数、二面体群では鏡映軸の本数です。また変換の個数は数学的には群の位数と呼ばれ、家紋が有する幾何学的対称性の程度を示す指標となります。

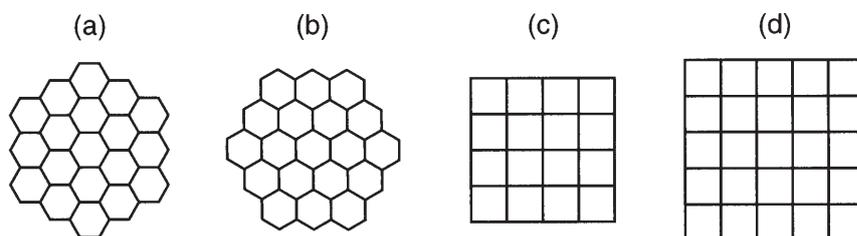


図2 実験で使用された円形要素図形の仮想的枠組。(濱田ら、2011より改変)

本稿では客観的・数学的に定義される幾何学的対称性を人間がいかに認知しているかを心理学的実験に基づいて論じます。しかし家紋は幾何学的対称性の他に、例えば家紋の具象性・抽象性の差異、家系が有する権力の差異など、多くの異なる図形的要因を含んでいます。そこで本研究では家紋を用いず純粋な幾何学的対称性と人間のパターン認知の関係を検討するために、図2に示されている正六角形を同心円的に隙間なく埋め尽くした亀甲的な枠組(図2aと図2b)、そして4×4の正方行列(図2c)および5×5の正方行列(図2d)の枠組を使用します。ここで亀甲的な枠組に配された複数個の黒あるいは白円からなる要素図形は巡回群を生成するC<sub>3</sub>、C<sub>2</sub>、C<sub>1</sub>図形および二面体群を生成するD<sub>3</sub>、D<sub>2</sub>、D<sub>1</sub>図形になります。一方、正方行列の枠組に配された複数個の黒あるいは白円からなる要素図形は巡回群を生成するC<sub>4</sub>、C<sub>2</sub>、C<sub>1</sub>図形および二面体群を生成するD<sub>4</sub>、D<sub>2</sub>、D<sub>1</sub>図形になります。

## 2. 実験1：亀甲模様の構造と良さおよび複雑さ判断

濱田・石原(1987)とHamada & Ishihara(1988)は幾何学的対称性のうちの鏡映対称と回転対称を取り上げ、亀甲的枠組(図2a)の中に9個の黒円を配置した2次元平面図形を念頭にして二面体群を生成するD<sub>3</sub>、D<sub>2</sub>、

D<sub>1</sub>図形、そして巡回群を生成するC<sub>3</sub>、C<sub>2</sub>、C<sub>1</sub>図形を作成しました(図3の例示を参照)。これらの9要素黒円図形は組み合わせ理論に関するポリアの基本的な定理に基づいて62種類が選ばれました。そして18名の実験参加者は1点(非常に悪い、あるいは非常に単純)から7点(非常に良い、あるいは非常に複雑)

対称変換群	120°回転		180°回転		360°回転						
	D <sub>3</sub>	C <sub>3</sub>	D <sub>2</sub>	C <sub>2</sub>	D <sub>1</sub>				C <sub>1</sub>		
軸の方向	0° 60° -60°	30° 90° -30°	0° 90°	30° -60°	0°	30°	-60°	90°			
良さ	5.1	4.8	5.2	4.4	4.6	4.4	4.3	4.0	4.0	3.9	2.9
複雑さ	(3.2)	(1.7)	(3.2)	(2.0)	(2.6)	(4.0)	(3.8)	(4.0)	(4.1)	(4.5)	(5.8)
	[4]	[2]	[2]	[4]	[4]	[10]	[7]	[7]	[7]	[7]	[8]

図3 対称変換群による9要素黒円図形の分類および良さと複雑さの平均評定値。(濱田・石原、1987より改変)

までの7段階の整数で図形の良さと複雑さを評定したのです。

その実験結果に基づいて対称変換群ごとに、そして鏡映軸の方向別に平均評定値を算出して図3に示します。ここで良さは括弧なしの数値で、複雑さは括弧内の数値で平均評定値が示されています。また最下段の鍵括弧の数字は実験で使用された図形の数(総数で62)です。図3の数値から対称変換群(C<sub>n</sub>、D<sub>n</sub>)別に平均値(n=1, 2, 3)を算出し図4に示しました。この図で平均評定値が巡回群(C<sub>n</sub>)は○印で、二面体群(D<sub>n</sub>)は●印で示され、良さは実線で複雑さは点線で結ばれています。ここで群の位数(変換の個数)はC<sub>n</sub>図形がnであり、D<sub>n</sub>図形はnの2倍であることに注意してください(n=1, 2, 3)。

実線で示されている良さの評定値は巡回群の位数と二面体群の位数の関数として別々に増加しています。そしてD<sub>1</sub>図形の良さの評定値はC<sub>1</sub>図形の値よりも明らかに高いけれども、D<sub>2</sub>とC<sub>2</sub>図形の値(平均値は4.5と4.4)およびD<sub>3</sub>とC<sub>3</sub>図形の値(平均値は5.0と5.2)はほぼ等しくなっています。このように良さの評定値は巡回群と二面体群が別々になり群の位数の増加関数として2本の曲線が当てはまります。

一方、点線で示されているように複雑さの評定値は巡回群と二面体群に共通して群の位数の減少

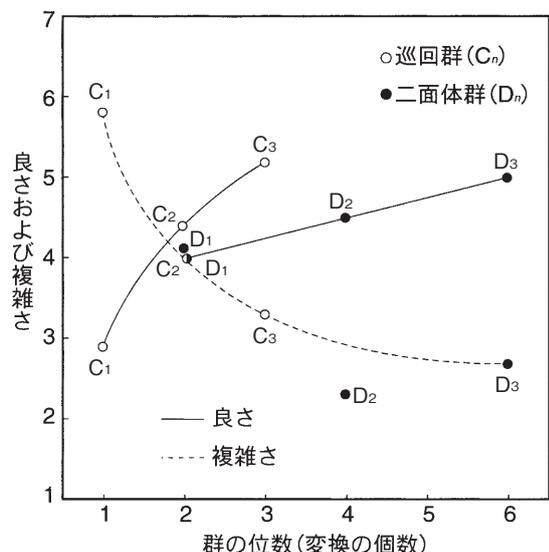


図4 群の位数(変換の個数)の関数としての良さと複雑さの平均評定値。(濱田・石原、1987; Hamada & Ishihara, 1988より改変)

関数として1本の曲線が当てはまります。この実験結果は亀甲的な枠組中に配された9要素黒円図形の良さと複雑さ（換言すると単純さ）は異質な認知判断であり、人間の情報処理過程の中で異なる処理を受けていることを意味しています。

### 3. 実験2：充填図形の直線成分が良さと複雑さに及ぼす効果

濱田（1988）は亀甲的枠組（図2aと図2b）中に19個の黒円および白円を配した $D_n$ と $C_n$ の充填図形（ $n = 1, 2, 3$ ）を作成しました。充填図形の名称は亀甲的枠組の全ての枠目に黒と白の円形要素を配置したことに由来します。その充填図形の例を図5に示します。ここで3個の黒円が連続する直線成分3本を含む図形（以下、直線充填図形と略称します）、そしてそれらの直線成分を含まない図形（以下、非直線充填図形と略称します）に分類しました。さらに図5に示されているように

	対称変換群					
	$D_3$	$C_3$	$D_2$	$C_2$	$D_1$	$C_1$
直線 充填図形	 5.2/1.8 (5.6/1.7)	 5.0/1.6 (4.8/2.4)	 5.3/2.2 (4.6/3.2)	 4.4/2.1 (3.8/3.3)	 3.3/3.3 (2.7/5.0)	
非直線 充填図形	 5.7/3.9 (5.1/4.6)	 5.5/4.5 (5.8/4.7)	 5.0/3.0 (4.6/2.7)	 4.0/5.1 (4.0/5.1)	 3.7/3.8 (3.2/3.6)	 2.3/3.8 (2.4/4.5)
	 5.0/4.3 (4.8/5.2)	 5.4/3.7 (5.2/4.6)	 4.6/4.9 (4.9/4.3)	 4.6/4.0 (4.6/4.3)	 3.5/5.5 (3.4/5.6)	

図5 亀甲的枠組の中で隙間なく配置された充填図形における基本図形、および良さ（左側の数値）と複雑さ（右側の数値）の平均評定値。括弧なしの数値は基本図形、括弧内の数値は白黒反転図形の平均評定値である。（濱田、1988より改変）

$C_3$ 直線充填図形は作成できないので直線充填図形は5種類、非直線充填図形は11種類が用意されました。ここでは基本図形だけが例示されています。しかし、それらの白黒を反転した白黒反転図形も使用しましたが、紙面の節約のために図5には示さず割愛されています。また図2aの亀甲的枠組を $30^\circ$ 回転させた図2bの枠組中の図形も使いました。したがって、この実験で使用された充填図形の総数は232種類でした。以下において、上述の実験1と同様に1点から7点の7段階評定法で測定された充填図形の良さ（実験参加者は88名）と複雑さ（同様に88名）の実験結果を説明します。

図6に19要素充填図形の種類および基本図形と白黒反転図形を込みにした良さ（実線）と複雑さ（点線）の平均評定値を群の位数（変換の個数）の関数として示します。ここで図6aには直線充填図形の良さと複雑さの平均評定値が示され、図6bには非直線充填図形の良さと複雑さの平均評定値が示されています。

図6aの良さに関しては群の位数が2である $C_2$ 直線充填図形と $D_1$ 直線充填図形の間には差が認められ、 $C_2$ 直線充填図形と $D_2$ 直線充填図形の評定値はほぼ等しくなっています。したがって、これらの $C_n$ と $D_n$ 充填図形の評定値は二面体群（●）の位数よりも巡回群（○）の位数に対する重みづけの方が高い2本の単調増加関数として示

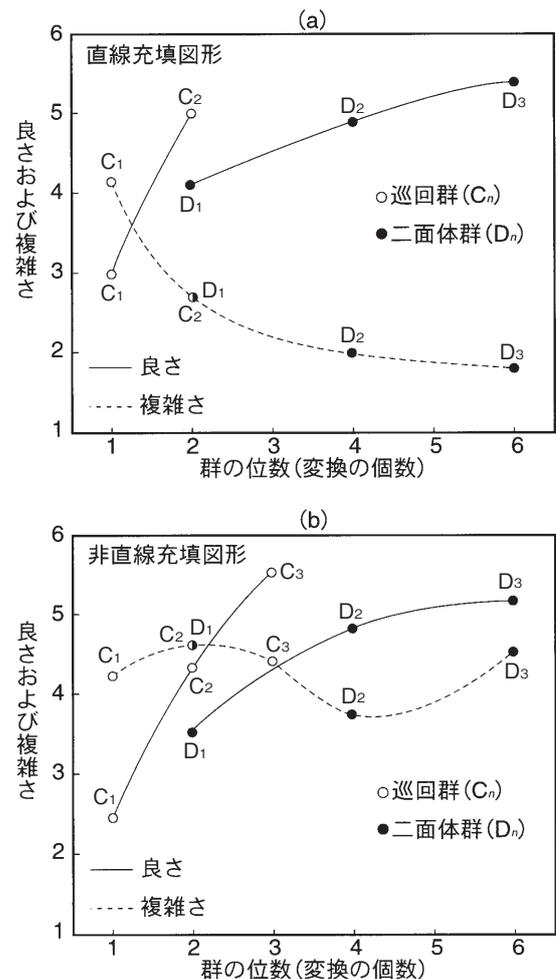


図6 群の位数（変換の個数）の関数としての直線充填図形の良さ(aの実線)と複雑さ(aの点線)、および非直線充填図形の良さ(bの実線)と複雑さ(bの点線)。（濱田、1988より改変）

されます。

一方、図6aの複雑さの群の位数への依存性から、複雑さの評定値は巡回群の位数と二面体群の位数が等しく重みづけられた単調減少関数として示され、1本の曲線で結ばれています。この結果は実験1の場合（図4の点線）と同様に複雑さにおいては $C_n$ と $D_n$ 充填図形を区別する必要がないことを意味しています。

図6bの非直線充填図形における良さ（実線）の位数への依存性を見ると異なって重みづけられた巡回群の位数と二面体群の位数の関数として示され、 $C_n$ 充填図形に対する重みづけの方が $D_n$ 充填図形よりも高いことが分かります。ここで $C_2$ 充填図形と $D_1$ 充填図形の間には差が認められました。したがって直線充填図形（図6aの実線）と同様に19要素の $C_n$ と $D_n$ 非直線充填図形は区別されなければならない、非直線充填図形の良さの評定値は巡回群の位数の方が二面体群の位数よりも高く重みづけられた2本の単調増加関数として示されています。この図6aと図6bにおいて実線で示されている良さ評定値の振る舞いは図4の良さ評定値に酷似し、巡回群と二面体群の位数に対する良さの依存性は極めて強力です。

一方、図6bの非直線充填図形の複雑さは巡回群と二面体群にかかわらず全ての位数において中程度であり、直線充填図形の場合（図6aの点線）とは異なり、群の位数の単調減少関数としては表現できません。すなわち19要素充填図形の複雑さは、直線充填図形では群の位数の単調減少関数として1本の曲線として表現されますが、この関係は非直線充填図形においては容易に崩れています。

以上の実験2の結果は亀甲的枠組中の充填図形の良さと複雑さ（すなわち単純さ）が異質な認知判断であることを再び示し、さらに直線充填図形と非直線充填図形の複雑さが異なる情報処理を受けていることを明確に示しています。

#### 4. 実験3：複合図形における複雑さ判断と良さ判断

濱田ら（2011）は図2cと図2dの枠組中に配された原型図形を用い、対称変換群に基づいて図7に例示されている複合図形を作成しました。すなわち図7の2行目の白・黒極性（異色条件）では $5 \times 5$ 行列枠組（図2d）中に配された13個の白円要素からなる原型図形と $4 \times 4$ 行列枠組（図2c）中に配された8個の黒円要素からなる原型図形が枠組の中心を一致させて重ね合わされています。したがって、これらの図形を複合図形と呼ぶことにします。そして、この8個の黒円要素を白に変えたのが1行目の白・白極性（同色条件）であり、同じく複合図形です。同様に図7の3行目の黒・白極性（異色条件）では13個の黒円要素からなる原型図形と8個の白円要素からなる原型図形が枠組の中心を一致させて重ね合わされ、複合図形となります。そして、この8個の白円要素を黒に変えたのが4行目の黒・黒極性（同色条件）であり、これらも複合図形です。

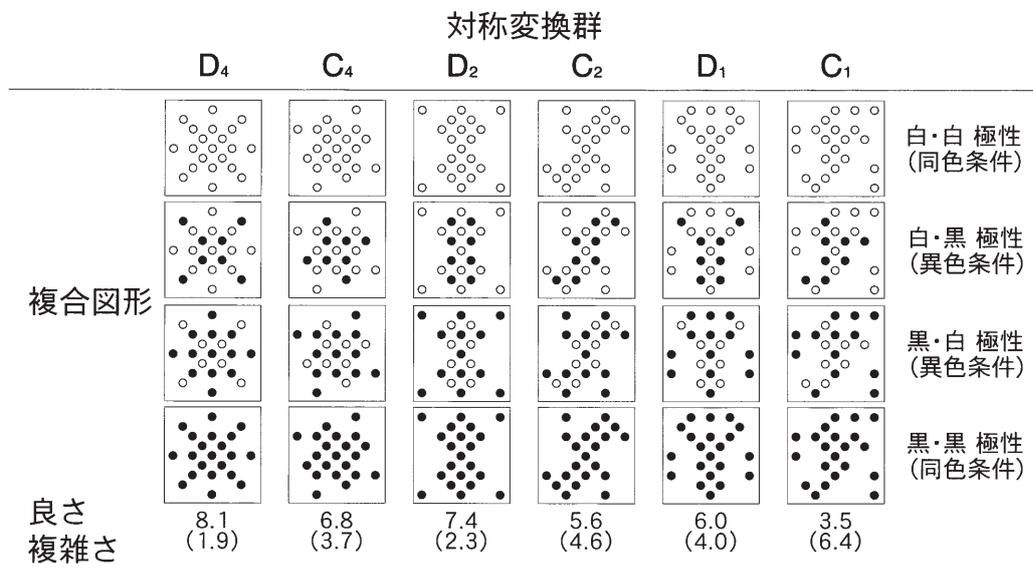


図7 21要素複合図形の例示および良さ（括弧なし）と複雑さ（括弧内）の平均評定値。（濱田ら、2011より改変）

ここで複合図形は二面体群の  $D_n$  図形と巡回群の  $C_n$  図形 ( $n = 4, 2, 1$ ) の合計で6種類に分類されます(図7)。このようにして総数144種類の複合図形を用いて288名の実験参加者が、これまでの実験よりは精度の高い1点(非常に悪い、あるいは非常に単純)から9点(非常に良い、あるいは非常に複雑)までの9段階の整数で複合図形の良さあるいは複雑さを評定しました。その実験結果を以下に説明します。

まず最初に複合図形の円形要素の白黒の効果を検討しました。その結果、図7の4つの条件、すなわち白・白極性と黒・黒極性の同色条件、そして白・黒極性と黒・白極性の異色条件の間には差が認められませんでした。つまり複合図形に対する良さおよび複雑さは要素円の白黒には影響されず、複合図形の有する全体的な幾何学的構造によって決まっていた。そこで4つの条件を平均した値を図7の最下段に示します。そして図8に群の位数の関数としての良さ(実線)および複雑さ(点線)を図示しました。

ここで  $C_n$  複合図形 (○) と  $D_n$  複合図形 (●) を区別して図8を見ると、 $C_n$  複合図形および  $D_n$  複合図形 ( $n = 1, 2, 4$ ) の良さは明らかに単調増加を示し、複雑さは群の位数に対して明らかに単調減少を示しています。そして複合図形の良さの評定値は二面体群の位数の方が巡回群の位数よりも高く重みづけられた2本の単調増加関数として示され、複雑さの評定値は巡回群の位数の方が二面体群の位数よりも高く重みづけられた2本の単調減少関数として示されています。さらに良さと複雑さは非常に高い負の相関 ( $r = -.997$ ) を示しました。これは複合図形の良さと複雑さ(すなわち単純さ)が人間の認知系の中で同じ情報処理を受けていることを意味しています。

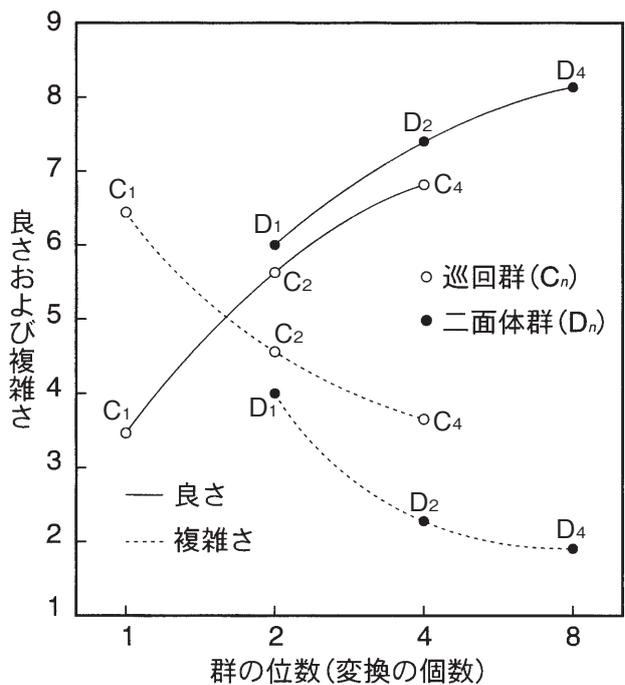


図8 群の位数(変換の個数)の関数としての良さと複雑さの平均評定値。(濱田ら、2011より改変)

## 5. パターン認知における階層構造

以上の知見を考慮し心理学的実験結果に基づいてパターン認知における階層構造を図式化すると図9のようになります。すなわち低次の第1階層は非直線充填図形の複雑さ判断に係わり、非直線充填図形の複雑さは群の位数にも  $C_n$  配置と  $D_n$  配置にも依存せず全て中程度であり(図6bの点線)、構造化の情報処理を受けず「円形要素の位置」に依存して最低次の第1階層で決まる判断であると考えられるのです。

一方、第2階層は亀甲の枠組中の9要素黒色図形(実験1)と直線充填図形(実験2)の複雑さ判断に係わり、「対称性(群の位数)」や「直線成分」などの大まかな構造化を受

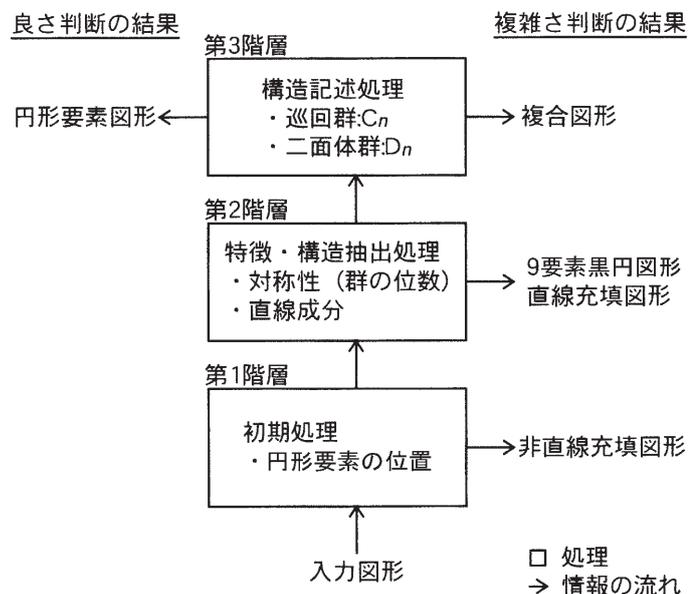


図9 円形要素図形の複雑さと良さ判断に対する3階層処理過程。(濱田ら、2011より改変)

けて処理されていると考えられます。つまり、これらの円形要素図形の複雑さは群の位数には依存しますが  $C_n$  配置と  $D_n$  配置には依存しないと考えられます（図4と図6aの点線）。なぜならば、これらの図形の複雑さ判断は巡回群と二面体群が区別されていない群の位数に規定され、かつ直線成分の影響を強く受けていたからです。

最後に、複合図形の複雑さは図8の点線で示されているように、 $C_n$  配置と  $D_n$  配置に依存し、高度な構造化を受けて第3階層で処理されていると考えられます。そして複合図形の複雑さと良さは非常に高い負の相関を示し同じ構造化の処理を受けていました。また良さは9要素黒円図形（図4の実線）、充填図形（図6aと図6bの実線）、そして複合図形（図8の実線）において例外なく「巡回群（ $C_n$ ）の位数」と「二面体群（ $D_n$ ）の位数」に別々に依存して決まっていた。このように全ての円形要素図形の良さ、そして複合図形の複雑さは高い構造化を受け最高次の第3階層において処理されていると考えられます。

上述の3つの心理学的実験から、円形要素図形の良さと複雑さ（すなわち単純さ）は異なる認知判断であり、良さは円形要素図形の種類にかかわらず全てが認知系の最高次の階層で巡回群の位数と二面体群の位数により頑健に決まると結論されます。そして複雑さは円形要素図形の種類に依存して認知系の3段階の階層において諸々の要因に規定されて個別に決まると結論されます。

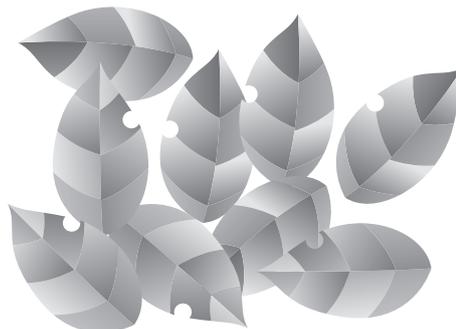
## 6. おわりに

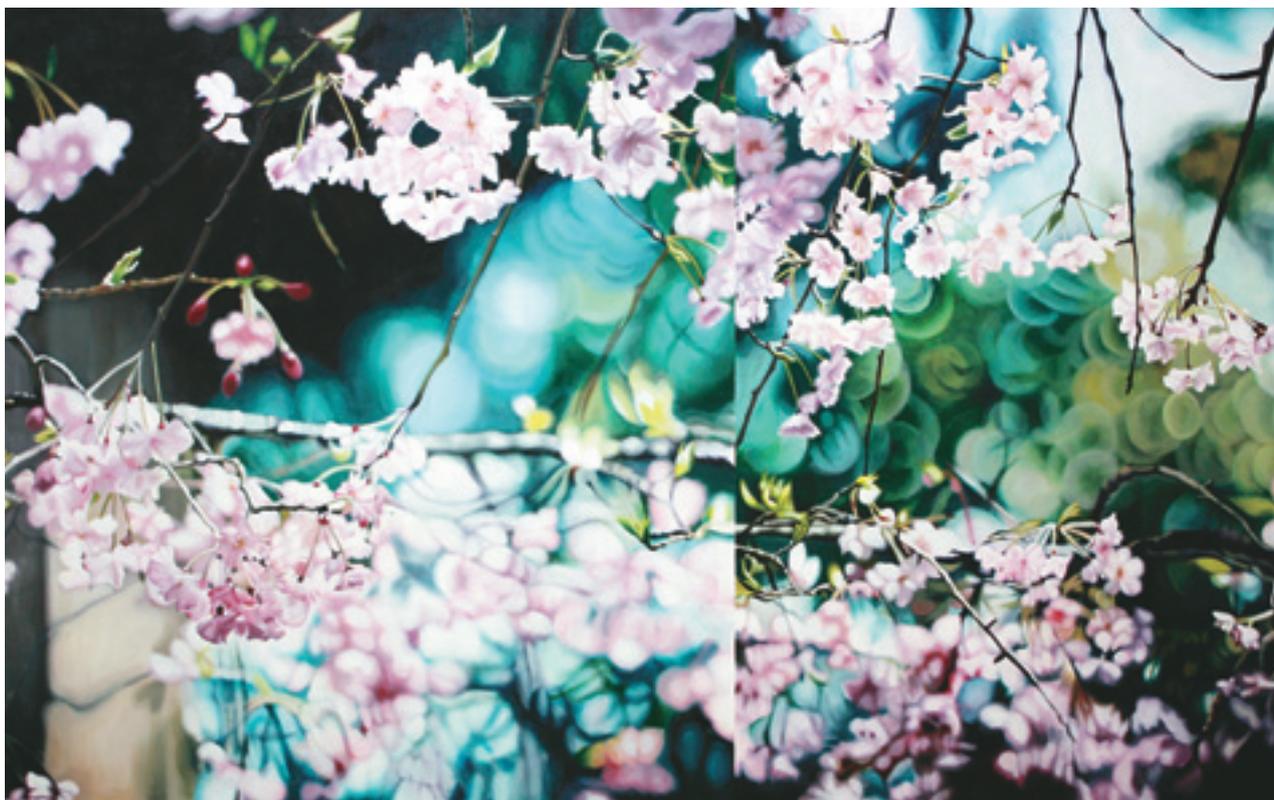
我々は日常生活において、何の疑問も持たずに苦もなく容易に外界を認識していると思いがちですが、このような円形要素の対称図形に限っても変換群の理論に整然と従いながら、3段階の階層からなる情報処理を経てパターン認知を実行しているのです。これは動物あるいは人間が永い進化の過程で獲得した、優れて精巧な驚くべき能力の一つなのです。

### 引用文献

- 濱田治良（1988）. パターンの複雑さと良さにおける対称変換群の効果 心理学研究, 59, 137-143.  
濱田治良・石原 徹（1987）. 亀甲模様の構造と複雑さおよび良さ判断 徳島大学総合科学部創立記念論文集, 305-316.  
Hamada, J., & Ishihara, T. (1988). Complexity and goodness of dot patterns varying in symmetry. *Psychological Research*, 50, 155-161.  
濱田治良・内海千種・福士顕士・天野 要（2011）. 対称変換群に規定される円形要素図形の複雑さと良さ 心理学評論, 54, 138-152.

（昭和46年小学校課程心理学教室卒）





「さくらさくら ~花降る里よ~」

## 今描くべきものとは

美 浪 恵 利

本格的に作家活動を始めて10年ほど立つ今、以前にも増して意識していることがある。それは、我々日本人が大切にしてきた精神文化、価値観や死生観、あるいはその佇まいを、作品を通して表現したいということである。

3年前の、あの大地震が起こった日から、刻々と変化する世界情勢の中において、私は悲しんだり憤りを覚えたりと、日々感情を震えさせている。そのことにより私は、自分自身が、日本人以外の何者でもないことを今改めて自覚させられている。

震災の後、絵描きとして、私は今何を描くべきか考えた。答えはすぐに出てきた。それは日本人にとって特別な存在である桜だった。桜は自分にとって、昔から、大好きだけれど花びらが一枚一枚小さくて描くのがきつと大変だろうという思いから、モチーフとしては敬遠してきた存在だった。しかし、今自分が描かねばならないのは、桜以外にはない、そう感じた。亡くなった方々への鎮魂の想いと、この悲しみを乗り越えて生きていかなければならない、日本人全員に向けて描こうと、130号の大作に取りかかった。作品は、3ヶ月間もがき続け、本当に命を削って描いたのち完成した。展示の機会を得

た際に、福島出身のある美術雑誌の女性記者が、作品を前に、涙ぐんでいらっしゃった姿を見たときは、この作品を描いてよかったと、心から感じた瞬間だった。作品は今度の秋、震災にあたり多大な支援を寄せてくれた台湾で展示される。台北のアートフェアという場所ではあっても、図らずもあの作品が台湾で展示される運びとなったことは、私にとって、日本からの感謝の思いを伝える機会を頂いたようでとてもうれしいことである。

この作品を描いて以来、桜は私にとって、生涯を通じて描いていかねばならないモチーフの1つとなった。この秋に控えているパリの個展でも、80号の満開の桜の作品を主役に、日本の四季を織り交ぜたような作品展の構成を今考えている。

パリで活躍した日本人作家と言えば藤田嗣治である。女性や猫をモチーフとした絵が有名であるが、戦時中には陸軍美術協会理事長となるなど、戦争画も多く描いた。戦後には戦争を



煽ったなどとその責任を一手に負わされ「日本に捨てられた」と言ってフランスに戻ったのちには、二度と日本へは帰ることはなかった作家である。先日、テレビで「嗣治からの手紙」というドキュメンタリー番組を見た。番組では冒頭から何度も「藤田はなぜ戦争画を描いたか」というナレーションがはさまれていた。

そんなことは簡単である。自国日本を愛していたからだ。

国のため戦う一兵卒とともに、一、日本人絵描きとして戦っていたのだ。その証拠に「アツツ島玉砕」の大作には、皇紀の年号で「2604 嗣治」と当時描かれていた。敗戦の年の8月15日になるとすぐ藤田は「T.Fujita」とサインを書き替え、年号を西暦の「1943」に書き替えたという。今までは日本でしかこの絵を見ることができなかったが、これからは世界の人が見ることになるだろうからと。藤田は友人に当てた手紙でこう書いている。「結局私たちはなすべきことをなして破れたので決して後悔はしません。やはりああ言ふ道を渡らなければならなかった運命に生まれたのだったと思います。」(1945年8月31日付の手紙)

そんな藤田を日本社会は戦後、手のひらを返したように非難した。

絵描きの自分は、まだまだ藤田の足下にも及ばない存在ではあるが、「今こそこの作品を描かねばならない」という使命感に駆られて藤田が戦争画を描いた気持ちが、戦後70年を前に、同じ絵描きとして手に取るように分かる。

国民の士気を高める為ではない、ただ今描かねばならない、その使命感のみで藤田はこの大作に取り組んだのではないだろうか。それ以外の意図はなかったのではないか。絵をプロパガンダの為に描ける作家もいるであろうが、同じ描き手として私にはこの大作がそれだけで誕生するとは思えない。絵に対して、また、共に戦い命を落としていった同胞に対して、真っ直ぐであればあるとするとするほど、戦後の日本にとどまることはできなかったのではないか。

三島由紀夫の言葉を借りれば、無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜け目のない姿をした、今の日本の将来像を当時の藤田は感じ取ったのではないかとさえ思う。

今、この現代において生きていく為に必要なのは、ただただ自国を愛する一国民として、もっと謙虚に自分の祖先たちが歩んで培ってきた国の文化や歴史を勉強すること、当時人々がどんな時代背景にあって、それぞれが、そのときどんな立場で、どんな気持ちで、どんなふうに住きたかに思いを巡らす



「さくらさくら ~PEARL RIVER~」

ことだと思う。そして祖父母やそのもっと前の先人の努力に誇りと感謝の意を持ちつつも、権威主義に流されやすかったり、ゴシップ好きであったり気移りしやすかったり、騙されやすかったり、すぐ人のせいにしてずるい面があったり、他様々自国の特質をしっかりと踏まえたいうえで、この先祖代々受け継がれてきたこの国土をよりよい形でどうやって次世代の子どもたちに繋いでいくか、大切なのはその一点であると思う。日本には、日本書紀に遡るほどの長い長い歴史があって、数十年の戦中があってそして戦後の約七十年が経ち、今があるのだ。その年月を経て、ようやく、心落ち着けて過去の歴史を、そして今後の道を探るときが今来ていると思う。

当然のことながら、時代ごとにその社会的背景や、使用される画材やまた表現方法によってできあがる作品は変わってくる。それはサインや年号に至るまでである。

私は藤田や三島のように今の日本に見切りを付けるほどの勇気も術もなにもないが、藤田が戦時中にしか戦争画を描けなかったように、私が今いる場所で、そのときにしか描けない、そしてそこで描くべき絵を描いていきたいと思う。

(平成17年人間社会学科

マルチメディアコース絵画表現研究室卒)

# Let's sports

体や健康、スポーツに関する話題を  
シリーズでお届けします

Vol.5

## ヨット部って？

鳴門教育大学大学院学校教育研究科 1年

なかのたかひろ  
中野太洋

昨年の3月に徳島大学を卒業した日から早1年。そんな時このLet's Sportへの執筆のお誘いをいただきました。私は高校からヨットを始め、縁があって徳島大学に入学後もヨット部に入部し、それからOBの方々などたくさんの人の指導、援助のおかげで四国インカレ優勝、全日本インカレ出場を果たすことができました。今ではすっかりヨットの虜になってしまっています。

ところで、いきなりですが“ヨット”と聞いてどんな映像をイメージされるでしょうか？こんな質問をすると多くの方がオールで漕ぐ“ボート”をイメージされます。ヨットは石原慎太郎さんが乗っていたあれです。最近では間寛平さんが世界一周された時に乗っておられました。さて、大学ヨット部では



2010年四国インカレ総合優勝時の集合写真（上段一番右が筆者）



帆の色は大学によって様々。徳大は左の艇

一人が船の端にぶら下がってバランスをとり、スピード感のある470級と大学ヨットが始まって以来長い歴史を持つスナイプ級という2人乗りのヨットが用いられます。詳しくは割愛しますがこのヨットに乗り、決められたコースを回る順位を競う、例えばマラソンのようなスポーツです。中でも470級というクラスは過去のオリンピックのセーリング競技でも採用されており、過去には2004年アテネオリンピックで関一人・轟賢二郎組が銀メダルを獲得しています。そして2016年リオオリンピック、2020年東京オリンピックでも採用される予定です。最近では、競技人口の増加やユース世代の育成強化によりメダルが期待される種目になっています。あまり知られてはいませんが大学ヨット部は中四国で約12校、関東では20を超える数が活動しています。2010年には、偶然にも野球の早慶戦と同じ日が全日本インカレ最終日であり、優勝をめぐる海の上の早慶戦が行われていました。その中に徳島大学ヨット部が含まれるわけです。

私たち徳島大学ヨット部は今年で創部60周年を迎えました。8月には60周年祝賀会が開催され、幅広い年齢の方が参加されたようで60年という歴史の長さを痛感しました。活動は毎週土日に鳴門にある艇庫の沖で行っています。ほとんどの部員が未経験な中毎週土日、長期休暇には週4日鳴門の海に出て練習します。自然相手のスポーツですから日々変わる条件に悪戦苦闘しながらヨットの帆走技術を磨きます。また、ヨットは2人乗りなので1人では動きません。時に、一緒に乗る部員と考えぶつけ合いながら肉体的にも精神的にも成長します。最近では、そ

の成果として2010年に四国インカレ総合優勝を皮切りに、470級は2011年、創部以来最高のインカレで16位、昨年は四国インカレ4連覇を達成し、今年は夢の5連覇、そしてインカレでの上位入賞を目標に掲げています。また、競技以外では徳島ヨットクラブの方のご好意でクルーザーに乗せてもらい、学生だけでなく上は60歳まで皆さんとビール片手に楽しくクルージングもしています。

競技時間が気象条件に左右されやすかったりルールが複雑であったりと何かと

敷居が高い競技ですが、レース海面を陸の近くに設置したり、国体やインターハイでは解説付きでネットで中継配信が行われています。まだまだ意識しないと目に留まりにくい競技ではありますが少しでも興味を持っていただけたら幸いです。ヨットは生涯スポーツです。私自身、卒業した現在でもヨット部の練習に参加し、兵庫県の西ノ宮を拠点に活動されているクルーザーのチームでセーリングを続けています。



創部60周年祝賀会の様子

最後になりましたが今ここにこうして執筆させていただいているのも渭水会から部への援助のおかげ、当時お世話になった関係者のOBの皆様のおかげです。これからは少しでも後輩の力になりたいと思います。最後まで読んでいただきありがとうございました。

(平成25年社会創生学科環境共生コース卒)

## ワーグナー・オペラとの出会い



大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部教授

石川 榮 作

九州で8年間の大学生活を送ったのち、私は昭和53年4月に徳島大学教養部に赴任してきました。着任してからも大学院時代以来の課題であるドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルングの歌』研究を続け、十数年後の平成4年には文学博士号を取得することができました。その博士論文を書いている過程で当然のこのように出会ったのが、ワーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』四部作です。その音楽を聴いて感動しているうちにインスピレーションを得て、「白紙」論文の状態から「博士論文」が出来上がったと言ってもよろしいかと思えます。

さらに感動したのは、ワーグナーの時代から上演されてきた楽劇『指環』四部作が、第二次世界大戦で一時中断したのち、戦後初めてバイロイト音楽祭で上演されたちょうどその日（1951年7月）に私が生まれたということを知ったときでした。このワーグナーのライフ・ワークとも言うべき楽劇『指環』四部作に出会うのは、やはり宿命だったのでしょうか。ドイツと日本では時差があるとはいえ、それを思うと、大いに感動し、その感動がまた大きな刺激となって、ワーグナーに関する数冊の著書を出版することもできました。1997年には、長年の夢であったドイツのバイロイト祝祭劇場にも出かけて、楽劇『指環』四部作を鑑賞することもできました。またワーグナーの孫にあたり、長年バイロイト音楽祭の総監督を務められたヴォルフガング・ワーグナーさんともお会いする機会にも恵まれ、がっちり握手をしてくださったときには、身体が震え上がるほどの感動を覚え、ワーグナー・オペラが以前よりももっと身近に感ぜられました。ワーグナー・オペラとの出会いは、私にとって研究面での成長になくてはならないものだったと言えます。

ワーグナーからオペラの世界に入って行きましたが、今ではドイツのベートーヴェンやモーツァルト、そしてイタリアのヴェルディやプッチーニをはじめ、さまざまな作曲家のオペラに魅せられています。ドイツでも、また日本でも、オペラ劇場に入って座席にすわると、ワクワクしてきて、このようなすばらしい芸術作品を鑑賞できることにこのうえない喜びを感じます。私にとってはオペラに感動することが「生きる」ということです。「美しいもの」に感動する「真の喜び」を大学の授業でも学生に伝えていきたいと思えます。人間を育てるのは、「知識」よりも「感動」です。「感動」が人間を育てます。これは私が徳島大学で長年教鞭を取ってきて、自分の信念の一つとなったものです。



# 総科のおたから

## あさぎいとす がけおとし ごまいどうぐそく 浅葱糸素懸威五枚胴具足

其ノ三

徳島藩と藩主・蜂須賀家ゆかりの文化財は徳島市立徳島城博物館で多数見ることができるが、わが徳島大学にも貴重な史料が所蔵されている。

そのうちのひとつが、この「浅葱糸素懸威五枚胴具足」。大きな半月の前立、蛇の目紋を据えた吹返しが印象的な六十二間筋兜に、重厚な面頬（めんぼお）、籠手（こて）、佩楯（はいだて）、臍当（すねあて）を備える。指揮具である采配、陣羽織も付属していることから、上級家臣用の具足であると考えられる。

本学には、ほかにも御貸具足（大名家所有の武具。非常時に足軽たちに貸与した）などに用いられた「黒漆塗左万字紋入腹巻」や「黒漆塗畳具足」などが所蔵されている。昭和20年（1945）の徳島大空襲によって、かつての徳島城下は焼失してしまい、県内には藩士の甲冑がほとんど残っていないのだとか。貴重な武具コレクションといえる。



江戸時代の作とされる「浅葱糸素懸威五枚胴具足」。  
上級家臣らしく、勇壮ななかにも華やかないでたち



足軽たちが着用した「黒漆塗畳具足」。  
黒ずくめの指物で揃えた蜂須賀の軍勢は「阿波の黒鴨」と恐れられたとか

# スタートライン

S T A R T L I N E

## 感謝の学生生活

中畑 明理



この度は総合科学部涓水会々報にこのように寄稿できる機会をいただきまして、ありがとうございます。私はこの3月に徳島大学総合科学部人間文化学科国際文化コースを卒業し、4月からは地元である兵庫県で生協職員として働いています。

徳島大学を卒業してから4カ月ほどしか経っていませんが、4カ月前は大学生だったという事実がにわかには信じがたいくらい、長い年月を経たように感じます。振り返ってみると私にとって徳島大学で過ごした4年間は、人生のボーナスラックだったと言っても過言ではないほど濃い学生生活でした。そして私はこの4年間で心の底から誇りに思っています。そんな風に言葉にしてしまうとずいぶん薄っぺらく聞こえてしまうことが悲しいくらい、本当にそう感じています。

何がそれほどまでに私にそう感じさせるのかを考えた時に、「学ぶ楽しさ」を知ったことと「人との出会い」に恵まれていたことが浮かんできました。もともと、英語をもっと勉強したいという思いを持って大学に進学したのですが、英語をどのような分野から学びたいのかということをはっきりとは考えていませんでした。しかし大学で専門的な授業に耳を傾けているうちに、認知言語学という分野に出会い、私の知的好奇心がくすぐられました。そして大学での学びの集大成である卒業研究へとつながったのです。こうした学びの中で、英語という大枠からそれを生みだし扱っている人間についての興味が広がっていったように、知らないことを知ることが、わかることが純粋に楽しい。知識が増えていくことはもちろん、言うならば知らないことがたくさんある自分を見つけることがとても嬉しいのだということに気がきました。知らないことを認め、新しいことを吸収できるということがどれほど楽しいものかを知っているだけで豊かな気持ちになれるのは、素敵なことです。

それから、私は本当に出会う人すべてに恵まれているなと感じます。大学に入学するまでの私は自分の思い描く未来がすべて自分にとってふさわしいものであるかのように考えていました。今となればそんな傲慢な考え方をしていたことがものすごく恥ずかしいのですが、私の理想とすることがはたして幸せと感ずることに結びつくのかといえば、必ずしもそうではないことに気がついたのも周囲の人々の影響があったからです。自分の思い描いた未来とは180度違ってしまっても、それでいいのだと思える心の余裕と、そこから未知なる可能性を見出す貪欲さを武器に、自分自身の可能性を広げることができるのだと思えるようになったのです。困った時には手を差し伸べ、辛い時には一緒に泣いてくれる。嬉しい時には手を取り合い、迷った時は進むべき方向へと導いてくれる。そうやって私と関わってくれる人がたくさんいます。そんな人々と出会えたことは私にとって最大の幸せなのだと思います。

そしてその幸せは社会人となった現在も感じています。4月から新しい環境へと身を投じたわけですが、ここで出会う方々も本当に素敵な方々ばかりです。こんな人になりたいと憧れる目標の人も出来ました。現在の状況はかつて私が思い描いていた未来とは違いますが、大学で知った「学ぶ楽しさ」が現在の仕事に対する原動力になっているのだろうと思います。私が周囲の方々から多くのことを学び、支えてもらっているように、今度は私も誰かの支えになれるといいなと考えています。感謝の気持ちを忘れずに、社会人としての生活を現在進行形で楽しめ、そんな心を持ち合わせて仕事に邁進していきたいです。

(平成26年人間文化学科国際文化コース卒)

## 徳島大学があつての今

### 阿部 沙紀

総合科学部で言語について専門に学び、現在は中学校で英語の講師として働いています。社会人として新たなスタートをきってから5ヵ月。新しい環境にもやっと慣れてきていますが、目まぐるしく変化する学校現場に完璧に慣れてしまうことは、この先ないだろうとも感じています。

英語教師になるための免許が取得でき、教育だけでなく幅広い知識も身につけたいと考えていたため、その両方が可能である徳島大学を選びました。総合科学部というだけあり、学べる分野は多岐にわたり、自分の専門分野を掘り下げるだけでなく、専門分野を中心に知識を広げていくことができました。同じ事柄でも、別の分野から見ると、全くとらえ方が異なるなど、他分野との関連で発見も多く、勉強するほどに新たな世界が開けていくようでした。

徳島大学での生活は、自分の勉強したいことができ、環境に大変恵まれていました。そんな大学生活を振り返って、一番良かったことは、多くの人に出会えたことだと思っています。ただ、沢山の友達ができたということではなく、全国、あるいは海外から集まった様々な人と出会い、話したり、授業を

受けたりして、多くの「違い」に触れることができました。それが自分にとって有益だったと思います。大げさかもしれませんが、自分と違う考え方や感じ方が無限にあることを実感しました。そして、その違いを発見していくことで、自分の世界を広げていけたと思います。

現在、中学校で働いていますが、毎日が新しい発見の連続です。同じことを言っても、昨日と今日では違う反応が返ってきます。クラスによっても全く反応が違います。4月当初は、その違いに戸惑うばかりでしたが、今は少し楽しく感じられるようになりました。今も様々な違いに触れて、自分の世界を広げていけている気がしています。ですが、まだ至らないことが多く、ベテランの先生方の行動を見て、教わりながら、生徒と共に毎日勉強しています。

実際に教育現場で働いてみて、大学で学んだ教育についての知識だけでは到底やっていけないと、痛感しています。社会人になって5ヵ月経ちましたが、教師という職への責任を持ち、あらゆることに興味を持って、学び続けていきたいと思っています。

(平成26年人間文化学科国際文化コース卒)

## スタートラインで考える課題

徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻環境共生分野 福永 衣留



私は平成26年に徳島大学総合科学部を卒業し、現在、徳島大学大学院博士前期課程に在籍しています。地元の鹿児島から離れ、徳島での生活は今年で5年目です。学部学生として過ごしてきた生活と大きな変化はありません。所属する研究室も同じで、原稿表題の「スタートライン」という感覚は弱い気がします。

同じ歳の友人はほとんどが社会人になり、新しい環境や仕事での体験を話してくれます。内容は様々ですが、「学生時代にもっとやっておけば、良かった」という言葉を聞きます。これまで、「今しか」、「今だから」という事は考えてきましたが、友人からこのような思いを聞くことで「今」を改めて考えさせられる切掛となっています。私たちの世代では大学入学当初からキャリア教育などで就職（就職活動）を意識させる教育が行われており、例えば、TOEICの点数も英語力の評価と言うよりは就職エ

ントリー・シートの準備かもしれません。博士前期課程（修士・2年間）は1年目から就職活動が始まります。ですから、就職活動に流されずに「今」をどのように生活していくか、課題です。

「今」をスタートラインと仮に考えるならば、実験者（研究者）としての独り立ちを目指しています。研究者としての就職は今のところ考えていませんが、「課題を見つけ、それを解決していく能力」を身に付けることに力を入れています。学部4年の時に国際誌に掲載された原著論文で日本学生支援機構から奨励賞を受けました。それは課題を解決した業績であり、課題を自ら見出したものではありません。現在、各種の化学物質（医薬品、医薬部外品、環境汚染物質など）の作用を細胞レベルで解析しています。研究テーマを自由に選べる研究室に所属していますので、自分で課題となる化学物質を探して実験をしています。例を挙げれば、冷感タオルに

含まれる抗菌剤のリンパ細胞に対する影響です。これまで専門知識や実験での課題解決能力の不足を痛感していましたので、実験に大いに励み、研究能力の向上に努めます。博士前期課程の2年間でどれだけの数の原著論文が残せるかに挑戦しています。もちろん、向上するのは研究能力ではありません。大学院総合科学研究部には実に多くの社会人・留学生の方が在籍しています。ゼミやグループワーク方式を取り入れた講義・演習では、専門が全く異なる人と貴重な意見を交換したり、普段は関わりのない内容の話が聞けたりして、社会・人生を考える

上で多くの視点を身に付けることができている。これは予想以上に充実しています。

正直、スタートラインはどこなのか、フライング・スタートなのか、スタンディング・スタートなのか、それらも明確ではありません。一日一日が何かのスタートラインのような感じがします。多くの視点を持ち、課題を見出して解決していく、それらの能力をバランス良く向上させる2年間になるように努力したいと考えています。

(平成26年社会創生学科環境共生コース卒)

## 学部生から院生へのスタートラインに立って

徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻修士1年 本田 沙理

私は平成26年3月に徳島大学総合科学部総合理数学科を卒業後、総合科学教育部に進学しました。学部では物事を多面的な視点から分析するという総合科学的概念に基づき、様々な分野の勉学に励みましたが、その中でも現象の原理、作用を分子レベルで解明することができる化学に興味を持ち、研究室に配属されてからは私たちの生活で身近なものである植物に含まれる機能性成分について有機化学的視点で研究を進めています。

大学院生としてのスタートラインに立った今、改めて私が進学を決めた理由とその背景について振り返ってみようと思います。私が大学院への進学を決めた理由は、学部生では学びきれない専門的かつ高度な応用技術をもっと身につけたいと考えたからです。3年後期になり研究室に配属された当時、大学院に進学するかどうかについては全く考えていませんでした。具体的に研究をベースとした生活とはどのようなものか、それまでの経験では計り知れないところがありましたし、そもそも自分の性質が“研究”というものにそこまで適応しているのか、不安も感じていたからです。

実際に研究生活が始まると、今まで考えたこともなかった無数の新たな知見に押し流されるかのような感覚を覚え、毎日をただひたすらこなすという作業に必死になっていたように感じます。ですがそのような環境に身を置く中、次第にわからないものがわかるようになり、ひとつの結果から新たな可能性が考えられるようになるにつれ、研究の楽しさや面白さ、奥深さを知れることに喜びを覚えている自分がいることに気が付きました。

研究室に配属されてすぐ、学部生としての就職活

動が始まりました。私は自身の専攻から研究分野での就職を考えていました。それらの会社の説明会に参加し、実際に社員の方の話を聞いていた時、私はふと、自分が座っている席よりも前列に座っている人たちの多くは大学院生であることに気が付きました。もちろん学部生の方もいましたが、社員の方の説明が終わった後も、商品の性質について話をもちかけ、熱心にディスカッションをしているのは、やはりそのほとんどが大学院生だったのです。この時私は、社員の方々と言葉を交わす彼らを傍目に見て、研究職を志望するものとして、この人たちと競い合えるほどの技術と知識を私は身につけられているのだろうか、と思いました。答えは実に明確で、そんなスキルは無い、でした。この答えが、後にも先にも私が大学院進学を決めた最大の理由となりました。

その後も少しの間就職活動を続けましたが、やはり一度心に抱いた疑念とその答えはダイレクトに私の行動に影響を与えました。結局、学部生としての就職活動は早々に切り上げ、進学してから院生として新たに社会に臨むことに決めました。

学部生と院生、経験を積むことによるのみ獲得できる技術を養うには、2年は充分すぎる期間であるように私は思います。同じ内容の教育を受けても、そこから得る知見の量は個人によりもちろん異なります。ですが私は学部から院へと進学し、その期間もより多くの技術を身につけたことは、あの時抱いた疑念に対する答えを払拭することに大きな力添えをしていると確信しています。

(平成26年総合理数学科物質総合コース卒)

## スタートラインから見えるもの

### 黒田 宙見

今年の3月に徳島大学大学院の臨床心理学専攻を修了し、福井で新生活が始まりました。福井での仕事が始まってから4か月以上が経ち、今の私は新たな「スタートライン」から一步踏み出したようなところででしょうか。私の目にいま何が見えているのかを書きたいと思います。

大学院中のボランティアや実習の経験から発達障害を持つ子どもと関わりたいと強く感じるようになり、私は福井にある発達（療育）外来を行うクリニックで働くこととなりました。発達外来の対象である発達障害の代表的なものは、知的障害、自閉症スペクトラム、注意欠陥多動性障害（ADHD）、学習障害です。私が担当する多くの子どもは自閉症スペクトラムや注意欠陥多動障害という診断を受けています。ちなみに自閉症スペクトラムは、①社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的障害、および②限定された反復する様式の行動、興味、活動（こだわりと呼ばれるものです）の2つの領域から診断されます。実際に毎日子どもと接する中で感じるのは、そんな定義が味気なく思えるような個性豊かな子どもがたくさんいるということです！毎日笑い転げたり、切なく胸が痛く感じたり、自分の無力さを実感したりする日々です。子どもたちは非常にパワフルで興味深い世界にいるのだなと毎日ワクワクします。でも、コミュニケーションに弱さがある子どもたちは、周囲から誤解を受けやすくうまく立ち回れずに窮地に陥っていたりすることを聞き、とても悔しく感じることもあります。ご両親が診断書を求めて受診されることもあります。自分たちの死後を非常に心配されており、子どもの自立が両親にとっていかに大切なのか胸が締め付けられるような切ない思いもします。

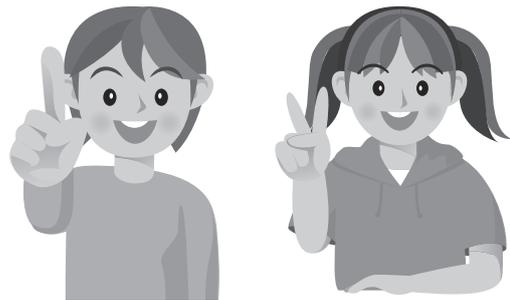
また、そうしたユニークで多くの場合アンバランスな子どもを育てているご両親は、他の子ども（定型発達児と言います）と比べて「どうしたらいいのかわからない」「自分ってダメな親だな」と感じる事が多々あります。そうした時にご両親の擦り減った気持ちに寄り添い、できることを一緒に考え探っていくこともしています。ご両親が流す涙に、この涙にはどのような思いが詰まっているのだろうと考えさせられます。お見送りする際にご両親の帰っていく背中から覚悟のようなものを感じることもあります。私が子どもやご両親にできることよりもいただいているものの方がずっとずっと多いのだと実

感する瞬間の1つです。

今の私の目標は、子どもから見える世界が子どもにとって安心でき、キラキラして楽しいものであることに役立つことです。私のスタートラインからの眺めはこんな風にドタバタして、笑い声も泣き声も聞こえ、たくさんの人の愛情と汗と涙がぎゅうぎゅうにつまったものです。今のこの眺めと自分の気持ちを大切にしながら前進していきたいと考えています。

（平成24年人間社会学科人間行動コース卒）

（平成26年総合科学教育部臨床心理学専攻修了）



## 子育て中のひとりごと

三浦由佳(旧姓 尾崎)

平成24年8月から今年の3月までの約1年7ヶ月間、育児休暇を頂きました。平成18年に就職してから約6年間働き、初めての長い休暇です。産前産後の期間は途方もない暇な時間に半ば廃人のようになりながら、そして出産後はあまりの睡眠時間のなさにフラフラになりながらの1年7ヶ月でした。休みの当初は永遠のように感じた時間でしたが、振り返るとあっという間でした。

思えば、妊娠中は出産がゴールのように感じ、その先の子育てについて考えることが疎かになっていました。初めて授乳するときに、助産師さんに「はい」と赤ちゃんを渡されて、こんなちっちゃい赤ちゃんを一体どうやって抱いたらいいのかそんなところから始まった子育てライフです。

分からないことだらけで、インターネットで検索したり、母に聞いたり、先に出産子育てしている友人に聞いたりしながらの毎日でした。母乳があまり出なかったのですが、世の中は「母乳育児推奨」で（ミルク缶にすら書かれています）、出てもないのに半ば意地になって1時間以上授乳し続ける日もありました。もちろん、子どもは大泣きです。病気であげられないなどの特別な理由もなく、母乳を十分にあげられない毎日がつらかったです。予想していたような赤ちゃんとのゆっくりした時間とはほど遠く、今までに味わったこともない身体的にも精神的にも限界ぎりぎりの過酷な日々でした。それでも

子どもの寝顔の可愛さでかろうじて理性を保っていたような気がします。それと同時に、こんな大変な思いをして二人も子どもを育てた自分の親に対する感謝の気持ちを、改めて感じずにはいられませんでした。

生後4ヶ月に子どもの卵アレルギーが発覚したことをきっかけに、主治医の指示のもと、自分の食生活の中から卵という食べ物を完全に除去する生活が始まりました。これが一番きつかったかもしれません。食べることが大好きなので、除去生活当初に過呼吸を起こしてしまいました。しかし、それでもアレルギー症状が改善されなかったため、生後半学期に断乳、完全ミルクに切り替えました。少し寂しかったけれど、もうその頃にはほとんど母乳は出ていなかったのか体をのけぞって拒否されていたので、その過程がなくなったことでもかなり楽になったし、おそらく子どもも楽になったのではないかと考えています。アレルギー用のミルクを使用していたのですが、普通のミルクよりも少し高く約3000円ほどする大きなミルク缶が1週間でなくなってしまったので、経済的には結構な負担でした。また、ミルク育児で大変なことは、夜も起きてミルクを作らないといけないところで（母乳だと寝たまま授乳することもできますが）、その点については夫がかなり協力してくれたので助かりました。その点についてとは言いましたが、クオリティを無視するならば子育ての一通りのことはできるくらい夫の協力は大きな支えでした。



自らの体験を通し感じることは、大家族で子育てをしていた昔とは違い、核家族化した現代においては夫（子の父親）の協力は必要不可欠な要素だということです。個人的な意見ですが、夫も子育ての当事者の一人であるので、子育てを「手伝う」のではなく、「協力する」「役割分担する」といった思考を持ってもらいたいです。ときには夫婦げんかをしながらでも、私はそのことを夫に伝え続けました。その成果あって、今のところ我が家ではそれがスタンダードです。

ただ、最初が肝心と思って「父親積極育児」をやりすぎてしまったところもあり、今では一般的に想

像される「父母の役割」が完全に逆転してしまっている状態です。今、私たちの子どもは1歳9ヶ月ですが、たとえ私が子どもと一緒にいてもその場から夫がいなくなると大泣きします。が、逆だと平気です。少し複雑な気持ちになりますが、開き直って自分の趣味にも時間を使いながらボチボチと子育てラ

イフ継続中です。今は少しずつ出てきた言葉に驚いたり、機嫌のいい時は一緒に踊ったりしています。未来はまだまだ遠いけど、後悔しないよう一瞬一瞬を大切に過ごしていきたいです。

(平成16年 人間社会学科人間行動研究コース卒)

(平成18年 人間・自然環境研究科臨床心理学専攻修了)

## エッセイ

# 草創期の恩師を偲んで

山田 秀雄

我が学部の先生方は自ら何らかの研究テーマを持っておられた。学生を御自分の専門分野に於て教育する事が最大のテーマと言えども勿論そうなのだが、密かに勉強を続けておられた先生も多い。何れもそれらは必ずお人柄に表れて、尊敬の的となったり学生を励ますことになったりもする。それが又教師たる所以でもあるのだが。

音楽教室の近藤良三先生も実に幅広い研究者としての経歴を持たれた方だった。専門の授業の他に合唱の指導とそのための資料や楽譜作り、対外的に依頼された多数の作曲など。時にはピアノの演奏もあった。現にそのレコードも残っている。その位は教師としては有り得べき事かも知れないが、その他に知られていない事では、フルートの演奏、グレゴリオ聖歌理解のためのラテン語。変わった所では何の為か高校数学など楽しげにこなしておられた。これは御趣味の範囲なのかも知れない。

指揮は御専門ではあったが、米国からルドルフの分厚い原書を取り寄せて翻訳し、指揮法の研究をされていた。

その上、難関でもある和声分析や和声外音の意味付けなど。ベートーベンの管弦楽法は全て理論上説明されたとは言え、彼が何故この音をここに入れたのか理解されないまゝ、その鳴りについて批判され、そのスコアが修正されて来た歴史さえあった。

「ベートーベンやモーツァルトの曲は聴けばすぐに分かる。それは何故か。私はそれを解明したい一生のテーマと思っている」これは極めて簡単な先生のコメントであったが、実は最大の難問なのである。先生は音楽理論のどの分野からアプローチしようとなさったのか、遂にそのことについてまでは明かされなかった。

目に見える活動の他に外側からは見えない近藤良

三先生の御研究は実に斯くの如くであった。

蒲池先生、小田先生、富本先生は言うに及ばず、今まで述べて来た先生方は全て我々生徒にも世間にもよく知られた学問的業績を重ねて来られた先生方ばかりである。勿論我々に知られない先生方の側面も多々あって我々に影響を与え続けて来られたし、時には生徒として、時には教師の卵としての生活指導を賜った事例も少なくない。

或る英語の時間、たまたま前の時間の黒板の文字が消されていなかった。丁度蒲池先生の時間だった。先生は「これはレストランで先客が食べ散らかしたまゝのテーブルを見るようなものだ。予習をちゃんとして来ることと、黒板をきれいにしておくこと、この二つは君たちの最低の義務としてやっておくように」と強く言われた。以後僕たちはどの時間でも黒板だけは美しく拭いておくよう心掛けるようになった。「それが常識だ」と言う勿れ。僕たちはそれ程未熟で非常識だったのだ。

蒲池正紀先生の御弟で蒲池正夫先生がおられた。徳大に來られたのが丁度私たちの卒業と入れ替りだったので残念乍ら教えて頂くことはなかった。後に県立図書館長になられたが、ドイツ文化が御専門らしく、専らドイツの国と交流されて徳島の文化に貢献された。

お二人は熊本県の御出身ながら徳島に來られて、全国最下位から2番目と悪評だった徳島文化の水準をそれなりの高さにまで高められた大恩ある御兄弟であった。

佐藤武雄先生にはドイツ語を教えて頂いた。テキストは普通のローマ文字なのだが、何故か文法の教科書の活字はいわゆる装飾的な亀甲文字で、読み慣れるまでは苦勞した。その筆記体となると更に又奇妙な形で、まるで古代文字を見るようなものだった。

あの複雑な語尾変化、格変化を次々と板書される

その記憶力には付いて行けず、専ら赤点続きで追試や再試で随分ご迷惑をおかけしたものだ。

「名詞の性も格変化もその内に慣れたら勘で分かる。「アイネちょうちん」と言える程にね。習うより慣れよだ。とにかく繰り返す事だ」太い黒縁眼鏡の怖い先生だったが面白い方でもあった。「西鶴の作品は是非読みなさい。楽しくて有益だから」ともおっしゃっていた。

植野豊治先生は「RとLの発音を正しく区別せよ」と初歩的原則を何度も言われた。「私は railroad を口の中で30回以上繰り返すと。するとそれがいつか必ず自分の身についている事に気が付くんだよ」

なるほど、これも粟津龍智先生が言われた「量から質への転換」だと思った。粟津先生は「たとえ意識しなくとも量的に積み重ねて行くと、或る時、ぽっと質的に変わった事に気付くんだ……」この時の先生の「ぽっと」というお言葉が極めて印象的だった事を思い出す。先生は出典については何も言われなかったが、その後探していて哲学辞典の中で見つけた。

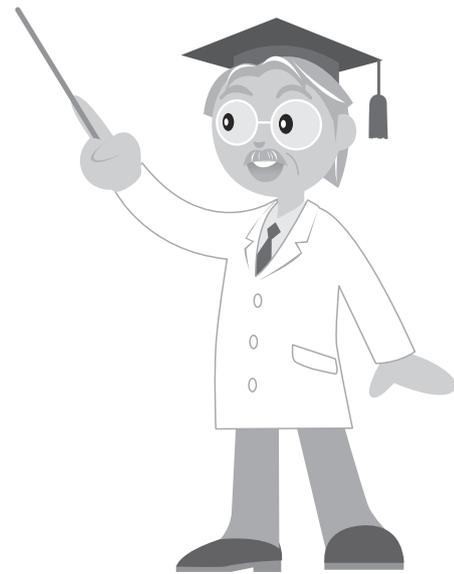
ヘーゲル「論理学」の中に原型があり、唯物弁証法の基本原則の1つであって、レーニン等により敷衍されているということである。通常は (Umschlagen von Quantität in Qualität) 「量の質への転化」と記される。

現在の「継続は力なり」の他に「最後まで諦めない」「努力は決して裏切らない」「夢は必ず叶う」などの流行表現も同工異曲の類いであろう。

私たちが最も恩恵を受けた教師の方々は旧師範の先生が多かったし、各教室には師範の先輩方が居られて何かとご指導頂いた。師範から再受験して大学生となった仲間もいた。キャンパス西側の寄宿舍「渭水寮」には横を通るのも恐れ多い先輩たちが睨みをきかせていた。

いくら第一回生と胸を張っても、我々は教育者を目指す以上綿々と続いて来た師範魂を受け継いで行く運命にあったわけで、伝統と呼ぶにふさわしい重みと親しさの渭水魂が、既に我々の胸の中に確かな形で脈々と受け継がれ今に至っていると信じている。

以前に書かせて頂いたことのくり返しになるけれど、この襟章は学芸的教養を表わす伝統的な「Liberal Arts Faculty」の頭文字と「大学」の文字とによって全体にTの形を構成し、わが学部



の象徴として堂々と力強く、又美しい。このデザインは美術教室の湯本禎三君の手に成るものと思う。残念ながらわが大学からは失われたが、「学芸学部」という格調高い名称は、その古典的な矜持を保っている数少ない県外の大学によって今なお誇らかに掲げられ維持されている。

私たち徳島大学学芸学部卒業生もこの襟章の思い出と共にその誇りをずっと持ち続けている積りである。

(昭和28年中学校課程音楽教室卒)

#### 【お詫びと訂正】

第42号 P26、山田秀雄様の原稿の中で、橋本先生のお言葉として、「いわゆる講義派……」とありましたが、「講座派」の誤植でした。ご訂正申し上げますと共に、深くお詫び申し上げます。

- 1、日時 平成25年4月30日(火)
- 2、会場 阿波観光ホテル
- 3、話し合い題目「吉野川に架かる橋について」  
(課題提供者 井内孝幸)
  - (1) 本格的永久抜水橋が架けられた  
写真1 三好橋 写真2 穴吹橋  
写真3 吉野川橋
  - (2) 阿波中央橋の完成 写真4 阿波中央橋
  - (3) 工費の安い潜水橋 写真5 脇町潜水橋  
写真6 千田潜水橋
  - (4) 阿波しらさぎ大橋の完成 写真7
  - (5) 吉野川に架かる橋の写真めぐり  
別冊で吉野川に架かる橋を40ページにわたり作成

私自身、学生時代は市場町と学駅の間を渡し船で通学していました。

この吉野川に南北住民の交通をはかる橋らしき橋が出来たのは昭和に入り治水工事が進んでからのことです。洪水のたびに流路を変える暴れ川には橋を架けることができず、南北の交流はもっぱら渡し舟であり、それに頼らざるをえないことはまことに不便で、時には危険をも伴いました。鉄道が南岸側にあるので渡し船は大いに利用されましたが、洪水などで出水するとたちまち舟止めとなり、渡ることが出来なくなりました。最善の方法は橋を架けることでした。いろいろ苦勞の末、永久橋が架かるまでの窮余の一策として考えられたのが工費の安い潜水橋の仮設でした。

治水工事の進展と架橋技術の発達とともに吉野川に本格的永久橋が架けられるようになり、時代とともに自然環境を配慮した立派な橋が次々に架けられるようになりました。

(昭和28年中学校課程数学教室卒)



写真1 三好橋



写真2 穴吹橋



写真3 吉野川橋



写真4 阿波中央橋



写真5 脇町潜水橋



写真6 千田潜水橋



写真7 阿波しらさぎ大橋

本年度の高校・特別支援学校部会総会は、平成26年8月23日（土）に、ホテルグランドパレス徳島にて、渭水会から石井博会長様、濱田治良副会長様、秋山賢治副会長様、毛利久康理事長様、大井美弥子事務局長様、総合科学部から平井松午学部長様のご臨席を賜り、また、顧問の皆様、高校・特別支援学校の会員の皆様のご出席のもと盛大に開催されました。

総会では、平成25年度の会務報告・決算報告の後、平成26年度の役員選出、会務計画・予算案についての審議を行いました。会務報告・決算報告・会務計画・予算案につきましては、事務局提案のとおり承認されました。

平成26年度の役員につきましては、現職の校長が副会長に、現職の副校長・教頭が監事に、退職された校長先生方を顧問に就任させていただくことにご了承いただきました。また、今回の総会において次期部会長として、徳島市立高等学校の井上薫校長先生を選出し、井上校長先生よりご快諾をいただきました。来年度につきましても、どうかよろしく願いいたします。また、総会終了前に、出席者全員が自己紹介をし、和やかな雰囲気の中、総会を閉じました。

講演会では、徳島県における英語教育の第一人者であり、国際交流で活躍されている四国大学総務・企画部参事の田淵憲治先生（S48. 中学校課程英語科卒）を講師にお招きし、「国際理解教育とグローバル人材の育成」をテーマに、ご講演をいただきました。

国際化にともなう教育政策の動きでは、第二次世界大戦以後国際理解教育に目が向けられ、中教審答申が出されるたびに、異文化理解や国際交流が学校教育に深く浸透されるようになりました。現在の国際理解教育の現状や目指す視点、今何が求められているかなど、詳しく教えていただきました。

また、田淵先生が高等学校で校長先生をされているときに、人権教育や国際理解の視点からワークショップを行ったこと、修学旅行でドイツに行き、その後もドイツとの交流を深めてきたことなど、画期的な取り組みにより学校改革を図られたお話には感銘を受けました。

日本の国においても、今グローバルな人材を育てていこうとする大きな動きがあり、さまざまな育成事業の取り組みがあることを知りました。最後に、「国際理解教育は、グローバル時代に即した『人づくり』であり、異なる価値観を認め合い、相手の人権を尊重する教育でなければならない」という言葉が、とても印象に残りました。

### 総会・講演会・懇親会

日時 平成26年8月23日（土）

場所 ホテルグランドパレス徳島

講演会 講師：田淵 憲治 氏

四国大学 総務・企画部参事

演題：「国際理解教育とグローバル人材の育成」

事務局 徳島県立国府支援学校



講演会の様子  
講師：田淵 憲治 先生



今回の講演会は、徳島大学渭水会本部の「渭水会助成事業」による助成金のもと開催いたしました。本部会には、学芸学部・教育学部・総合科学部卒業の各世代から幅広くご参加いただきました。世代は異なっても、同じ徳島大学渭水会という同窓の絆を確認し、友好を深める場となりました。

今後とも、大勢の会員の皆様のご参加をお願いいたします。

（部会長：昭和53年養護学校課程卒業 飯田）

徳島市退職校長会は、会員の研修と相互の親睦を図り、併せて本市の教育振興に寄与することを目標に活動しています。主な活動として、「総会・新入会員歓迎会」「叙勲・大臣表彰（章）祝賀会並びに講演会」に加えて教育支援部が中心になって、子ども支援活動を行っています。今年で5回目を数える「子ども歩き遍路ツアー」や「歩く遠足サポート事業」を実施しています。

世界に誇る文化遺産である四国八十八カ所のお寺を訪ねることで、身近のすばらしい先人の歩みを理解すると共にそれを守り、世界に発信できる子どもの育成に寄与する。“同行二人”共に歩くことで子どもの体力向上にもなればと考えて実施しております。

更に、会員の「絆」を深めるための活動として「いきいきサロン」を実施し、会員相互の情報交換にも力を入れています。

今回、会員の研修と親睦を図るために「講演会・祝賀会」を開催し、本会会員でもある方を講師に招いて研修したことについて報告いたします。

1. 期 日 平成25年12月8日（日）
2. 会 場 ホテルグランドパレス徳島
3. 演 題 コマアンサンブルを結成して
4. 講 師 生駒 元 氏
5. 講演要旨

- ◆高校生で徳島フィルハーモニーに参加し、オーケストラのあり方、運営方法、練習等について考えるきっかけになった。
- ◆1971年25才の時に徳島市民管弦楽団を結成し、初代事務局長として団の運営にあたる。

- ◆音楽教師として、オーケストラ部で音楽との出会いを大切にし、一生音楽が続けられる人に育てることを目標に指導してきた。
- ◆コマアンサンブルは「難聴児のためのコンサート」の依頼を受け、家族で20年前結成した。演奏回数は100回になる。楽しいアンサンブルであるが、音については妥協しないという姿勢で取り組んでいる。
- ◆チェロ、バイオリン、ピアノによる演奏で5曲を鑑賞した。
  - ・アヴェマリア
  - ・サウンド・オブ・ミュージックメドレー
  - ・ハンガリー舞曲
  - ・愛のあいさつ
  - ・夕焼け小焼け もみじ
 更にアンコールで1曲

#### 6. 会員の感想

- ◆生演奏を間近に聴くことができて感動した。家族による心なごむ演奏が人をひきつける魅力なのだ実感した。オーケストラのみんなで力を合わせて曲を作ることは人生のあり方に共通していると思う。
- ◆半世紀以上も音楽に関わっておられる先生の音楽に対する愛情が伝わってくる内容であった。家族だからこそ出せる味わいのあるアンサンブルも、切磋琢磨して1つの音を作りあげる姿勢が感動を呼ぶ演奏になるのだと思う。これからもずっと続けていたきたい。

（昭和44年小学校課程地理学教室卒）



スポーツ科学教室（現在の心理・健康コース）を平成26年3月末に退職される小原繁先生と的場秀樹先生へ卒業生より感謝を伝えることを目的とし、平成26年3月8日（土）、阿波観光ホテルにて、同窓生及び現役学生の共催で「小原繁先生・的場秀樹先生 退官記念講演会及び祝賀会」を行いました。日頃会うことが少ない卒業生同士の交流を深めることも目的のひとつでした。

平成25年8月頃より準備を開始し、涓水会の助成・ご協力をいただき、名簿の作成や会場の決定、案内状作成・送付などを行いました。

当日は、95名の方にご参加いただき、非常に盛況となりました。開始に先立ち、全員で集合写真を撮影。先生方の研究者としての歴史をスライドショーで振り返る講演では、学生との交流の様子も垣間見え、感慨深いものでした。的場先生の初代ゼミ生による乾杯、記念品贈呈や万歳三唱を小原先生のゼミ生が行うなど、それぞれのゼミ生も活躍し、感動とともに終了となりました。

後日、先生方より「非常に楽しく、嬉しい会であった」というお言葉を、参加者からも「先生、同窓生に久しぶりに会えて本当に良かった」という感想をいただき、大成功となりました。

（平成9年人間社会学科人間行動研究コース卒）



小原  
繁先生



的場  
秀樹先生



## 渭水会ホームページもご覧ください

渭水会本ホームページでは、お知らせや活動状況のご報告に加え、総合科学部構内や総合科学部が所蔵する文化財の写真などもお覧いただけます。また、トップページの「活動状況」の中には、この「渭水会々報」のホームページ版が掲載されており、ダウンロードしていただくこともできます。

会員の皆さまに、学生時代の思い出を振り返っていただけるような、親しみあるページを目指すとともに、母校の最新情報についてもお知らせしていきたいと考えております。是非、渭水会ホームページにお立ち寄りください。

ホームページ URL <http://www.isuikai.jp>

※検索エンジン（google、yahoo 等）で、「渭水会」と検索いただいてもご覧いただけます。

# 総科ニュース

※この総科ニュースについての詳細は、徳島大学総合科学部総務係にお尋ねください。

徳島大学総合科学部総務係 TEL：088-656-7103 FAX：088-656-7298

E-mail: sksoumk@tokushima-u.ac.jp

## 【総合科学部の1年】平成25年9月～26年8月

### \*平成25年9月11日(水)～15日(日)

#### 上勝インターユニ・フィールドワークの実施

総合科学部が参加する地域系大学・学部連携協議会との共催の下に、今回初めて大学間連携事業として実施しました上勝町インターユニ・フィールドワークには、鳥取大学・岐阜大学の教員3名・学生8名、総合科学部教員8名、学生17名が参加しました。町おこしの先進地である上勝町における現地体験・調査実習を通じて、地域への理解を深める授業の一環として実施されました。参加した教職員・学生からは高い評価を受け、報告書も刊行されています。



上勝インターユニ・フィールドワーク

### \*平成25年10月24日(木)

#### 徳島大学びざん会の開催

徳島大学びざん会(同窓会連合会)が阿波観光ホテルで開催されました。併せて、日亜メディカルホールの見学会も開催されました。

### \*平成25年10月28日(月) 学長選考委員会の開催

次期の学長候補に香川征学長が選出されました。香川征学長は再任で、任期は平成26年4月1日～28年3月31日までの2年間。

### \*平成25年11月28日(木)

#### 学部長と学部学生との懇談会を開催

学生15名、教職員11名が参加し、学生委員長の司会により、事前アンケートで寄せられた質問・意見を中心に、学生からの質疑に答える形で行われました。

### \*平成25年12月1日(日)

#### 明治大学・徳島県との連携講座の開催

明治大学駿河台キャンパス・リバティホールで、明治大学・徳島県・徳島大学との連携講座「ポルトガルの文豪モラエスシンポジウム-「美しい日本」をこよなく愛した異邦人-」が開催されました。これ

は平成25年11月3日(日)に締結された明治大学・徳島県・徳島大学の連携協定を受けて、交流事業の一環として実施されたものです。総合科学部からは、コーディネータの石川榮作教授のほかに、宮崎隆義教授、佐藤征弥准教授が報告しました。報告書も刊行されています。

### \*平成26年1月28日(火) 康楽賞贈与式の挙

徳島大学の優秀な専任教員および学生を対象とした公益財団法人康楽会による康楽賞の贈呈式が、長井記念ホール(蔵本キャンパス)で挙行されました。総合科学部の受賞者は次の方々です。

〔教員の部〕

平木美鶴教授「釘打ち法を使った絵画表現研究」

邵 迎建教授「日中戦争期における上海の話劇」

〔学生の部 学術〕

大学院総合科学教育部 2年次 稲井美由紀

総合科学部 4年次 中畑明理、阿部沙紀、  
福永衣里

〔学生の部 奨学金〕

大学院総合科学教育部 2年次 寺町 葵

総合科学部 4年次 清水秀幸、松浦可苗、  
阿部桃子

### \*平成26年2月7日(金)

#### 明治大学農学部との公開フォーラムの開催

総合科学部で、明治大学農学部との公開フォーラム「地域農業再生に向けた徳島県、徳島大学と明治大学の連携-Center of Communityを目指して-」が開催されました。これは明治大学・徳島県・徳島大学との交流事業の一環で、農業・農村問題や地域再生に関わる5件の報告が行われ、総合科学部からは平井松午教授、田口太郎准教授が報告しました。報告書も刊行されています。

### \*平成26年2月28日(金)

#### 教育部長と大学院学生との懇談会を開催

修了予定者5名、教職員8名が参加し、大学院教務・入試委員長の司会により、大学院生活、履修、修士論文、大学の設備などについての懇談が行われました。

### \*平成26年3月7日(金)

#### 福島支援活動報告会の開催

総合科学部の中山信太郎教授(放射線学)が中心となって進めている徳島大学福島支援活動の報告会

が、徳島大学日亜会館で開催されました。平成25年度の活動事業報告書も刊行されています。

**\*平成26年 3月10日 (月)**

**学長裁量パイロット事業報告会の開催**

総合科学部教職員対象FDとして、平成25年度パイロット事業支援(教育・社会貢献)報告会が開催されました。報告内容は次の通りです。

佐久間亮教授「学部専門教育国際化推進のためのカルチャ・ラウンジ機能強化プロジェクト」

豊田哲也教授「地域創生プレミアム人材育成のためのフィールドワーク・プログラム」

境 泉洋准教授「若者自立支援における認知行動療法の普及・定着事業」

高橋晋一教授「地域の持続的発展に資する機動型臨地教育／研究拠点の形成」

**\*平成26年 3月24日 (月)**

**平成25年度卒業式・修了式、優秀学生表彰の挙**

行 アスティとくしまで午前10時より挙行されました。当日午後には、総合科学部で優秀学生表彰および大学院学位授与式が行われ、14時よりパークウェストンホテルで謝恩会が開催されました。学部卒業生は237名、大学院修了者は博士前期課程の地域科学専攻30名、臨床心理学専攻13名、博士後期課程地域科学専攻が3名。優秀学生表彰者の4年生は次の通りです。

〔人間文化学科〕松浦可苗、谷口早紀、北上祐二、名田愛美、中畑明理

〔社会創生学科〕勢戸望珠、斉藤仁美、山岡沙織、堤 悠貴、阿部桃子

〔総合理数学科〕清水秀幸、赤川貴斗、本田沙理

**\*平成26年 4月 3日 (木)**

**地域連携プラザと「常三島けやきホール」の竣工**

総合科学部2号館の西棟(旧音楽棟)と東棟(旧美術棟)の間に、昨年度より建設が進んでいました2階建ての地域連携プラザ新棟が完成し、当日午前10時より香川征学長はじめ大学関係者列席のもとに地域連携プラザ竣工記念式典が挙行されました。西棟・東棟をつなぐ新棟部分の1階には多目的利用室2室のほか、子育て支援室「あわさぼキッズルーム」があります。2階部分には293名を収容できる地域連携大ホールが設けられ、学部内公募により総合科学部のけやき並木にちなんで「常三島けやきホール」と名付けられました。ホールの後ろ側147名分の階段式座席は可動式になっていて、多目的に利用することができます。ホールは入学生オリエンテーションや学部共通科目の授業などで利用されていますが、地域連携・地域交流を目的に一般貸出も行っていますので、ご利用をご希望の方は下記までお申し込みください。



テープカットの様子(左から石川榮作前総合科学部長、平井総合科学部長、香川学長、吉田和文地域連携担当理事)

**《常三島けやきホールの申込み》**

徳島大学総合科学部総務係

TEL: 088-656-7103 FAX: 088-656-7298

E-mail: sksoumk@tokushima-u.ac.jp

**\*平成26年 4月 7日 (月)**

**平成26年度入学式の挙**

行 午前10時より、アスティとくしまで平成26年度徳島大学入学式が挙行されました。同日午後には総合科学部で大学院オリエンテーションも行われました。入学者数は、総合科学部274名、大学院総合科学教育部博士前期課程46名、博士後期課程4名。

**\*平成26年 4月22日 (火)**

**総合科学部学生表彰を挙**

行 学業成績が優秀な学部3年生を対象した学生表彰式が挙行されました。受賞者は次の方々です。

〔人間文化学科〕入口成味、橋本 悠、谷 由里恵、高橋麻純、片野瑤子

〔社会創生学科〕藤本琴美、中谷真奈、荒木のぞみ、松尾優美菜、濱地由衣

〔総合理数学科〕角谷健太、窪田知晃、林 俊輝

**\*平成26年 4月22日 (火)**

**マラヤ大学(マレーシア)との大学間交流協定の締結**

マラヤ大学(マレーシア)のDr. Mohamed Rehan Bin Karim 工学部教授とDr. Ahmad Saifizul Bin Abdullah 上級講師が徳島大学を表敬訪問され、香川征学長、細井和雄国際センター長(副学長)立ち会いのもと、工学部・総合科学部と大学間交流協定を締結しました。

**\*平成26年 5月 9日(金) 大学院入試説明会の開催**

総合科学部学生31名、他の大学生4名、社会人1名、その他2名の合計38名が参加しました。

**\*平成26年 5月21日 (水)**

**城戸久枝氏によるトークと座談会の開催**

常三島けやきホールの竣工を記念して、総合科学部卒業生でNHKドラマ「遙かなる絆」(2009年放映)の原作『あの戦争から遠く離れて 私につながる

る歴史をたどる旅』で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞された城戸久枝氏によるトークと座談会が開催されました。城戸氏には、当日午後の1年次向け学部共通科目「キャリアプラン入門Ⅰ」でも講演していただきました。



城戸久枝氏のトーク

**\*平成26年6月7日(土) 渭水会総会の開催**

総会では、成績・研究・社会貢献等に秀でた4年次生を対象に「渭水会会長賞」を設けることが決まりました。

**\*平成26年7月3日(木)**

**地域系大学・学部連携協議会に参加**

宇都宮大学国際学部主催により、平成25年度地域系大学・学部連携協議会が宇都宮大学UUプラザで、翌4日(金)にはシンポジウム「地域への多様な接近」が宇都宮大学の大学会館で開催され、総合科学部からは平井学部長ほか3名が参加しました。

**\*平成26年8月8日(金)**

**オープンキャンパスの開催**

総合科学部のオープンキャンパスが開催されました。参加者数(延べ数)は、高校生705名、保護者174名。



オープンキャンパス

**\*平成26年8月16日(土)**

**総合科学部振興会総会ならびに保護者懇談会の開催**

在学生の保護者会である総合科学部振興会の評議員会(10時)・総会(11時)ならびに保護者懇談会(午後)が開催されました。参加者(延べ数)は21名。なお、当初8月9日(土)開催の予定でしたが、台風11号上陸のため、1週間ずらしての開催となりました。



保護者懇談会

**【人事異動】**

**\*評議員の紹介**

平成26年度より、大橋 守教授が新たに教育研究評議会評議員となりました。任期は平成28年3月末までの2年間。

**\*名誉教授の就任**

平成26年3月31日付で退職された次の教員が徳島大学名誉教授となりました。いずれも長きにわたって総合科学部などで教育研究活動に携わっていただきました。篤く御礼申し上げます。( )内は徳島大学での在職年数。

小原 繁 教授(37年)

立花敬雄 教授(36年3ヶ月)

的場秀樹 教授(23年6ヶ月)

**\*教職員の異動**

3月31日付で、次の教職員が退職されました。

北村修二 教授(地域政策論)

矢野和規 事務長

4月1日付で、次の教員が教授に昇任されました。

伏見賢一 准教授(量子物理学)

4月1日付で、次の教員が准教授に昇任されました。

松嶋一成 講師(経営学)、

吉岡宏祐 講師(アメリカ現代史)

4月1日付で、次の教員が特任講師に昇任されました。

原田 新 特任助教(臨床心理学)

事務職員には次の方々が着任されました。

平成26年1月1日付

宮城千穂 氏(学務係事務員)

平成26年4月1日付 谷 昭二 氏(事務長)、

田淵和也 氏(総務係主任)、佐々木あゆみ 氏(総務係事務員)

**\*新任教員の着任**

平成26年4月1日付で、次の教員が総合科学部に新たに着任されました。

小田切康彦 准教授(公共政策学)、土屋 敦 准教授(社会学)、ギュンター・ディルク 准教授(英米文学)、中塚健太郎 講師(コーチング論)

# 徳大ニュース

徳島大学に関するニュースをお届けします。詳細は徳大広報並びに本学ホームページを御覧ください。また、会員の皆様の御意見や御要望をお寄せください。

徳島大学総務部総務課 (Tel : 088-656-7021 Fax : 088-656-7012)

(E-mail : kohokakaricho@tokushima-u.ac.jp URL : http://www.tokushima-u.ac.jp)

## I 学内の状況

### 1 徳島大学藤井節郎記念医科学センター完成記念式典を挙行

平成25年11月18日、徳島大学藤井節郎記念医科学センターにて、完成記念式典を行いました。

藤井節郎記念医科学センターは、本学医学部の教授を努め、急性膵炎の特効薬開発等に貢献した故藤井節郎氏が設立した一般財団法人藤井節郎記念大阪基礎医学研究奨励会の寄付により、平成24年4月から建設が進められてきました。完成した藤井節郎記念医科学センターは、広いオープンラボや機器室等を備えた最新の研究施設で、生命科学を中心とする若手研究者の育成、世界トップクラスの研究拠点の構築を目指します。

基礎医学の発展に尽くし、若い世代の研究者の援助を念願された故藤井節郎氏の遺志を受け継ぎ、更なる学術・研究の発展に貢献していくことが今後の課題となります。

### 2 マレーシア工科大学との大学間交流協定を締結

平成25年12月13日、香川学長をはじめ、高石理事、野地理事らがマレーシア工科大学を訪問し、大学間交流協定を締結しました。

マレーシア工科大学は、マレーシア有数の国立大学であり、クアラルンプールのキャンパスには日本式工学教育を実践するマレーシア国際工科院(MJIIT)が開校されています。今後は、共同研究をはじめ、教職員や学生交流など幅広い交流が図られる予定です。

翌日の12月14日には徳島大学では5番目の卒業留学生同窓会となる「徳島大学卒業留学生同窓会(マレーシア)」を設立しました。

今回のマレーシア工科大学との学術交流協定締結と徳島大学卒業留学生同窓会(マレーシア)設立は、海外ネットワークの構築とグローバル人材育成を推進する本学の国際戦略を進める上で、大変有意義なものとなりました。

## II 学生関係

### 1 卒業式・修了式

平成26年3月24日、アスティとくしまで平成25年

度卒業式・修了式を挙行し、合計1,736名(学部卒業生1,220名、大学院修士(博士前期)課程454名、大学院博士(博士後期)課程62名)の卒業生及び修了生に、香川学長から学位記が授与されました。

香川学長からは「これからも学ぶことを続けてください。地域で、日本で、そして世界でご活躍されることを祈念します」との激励の言葉がありました。卒業生・修了生総代として、歯学部倉橋宏輔さんからは「徳島大学の卒業生としての誇りを持ってまい進みます」と答辞がありました。

### 2 入学式

平成26年4月7日、アスティとくしまで平成26年度入学式を挙行し、合計1,958名(学部1,333名、大学院修士(博士前期)課程469名、大学院博士(博士後期)課程109名、3年次編入学47名)の入学が許可されました。

入学式では、入学生を代表し、医学部医科栄養学科の竹治 香菜さんから「本学の教育方針に従って学則をまもり、学術の研究と人格の陶冶に努めることを誓います」と宣誓があり、引き続き、在学生を代表して、薬学部 鑛 隆一郎さんから「やらないで後悔するよりは失敗を恐れず挑戦してほしい、自分の国だけを意識するのではなく広い世界を意識してほしい」と歓迎の言葉がありました。その後、香川学長から「ゆっくり腰を据え、自分のキャリアデザインを描きながら、有意義な大学生活を送られることを願います」とのお祝いの言葉がありました。

### 3 企業の人事担当者が選ぶ大学総合ランキングで本学が全国6位にランク

就職・転職支援の日経HRが企業の人事担当者を対象に、「対人力」や「知力・学力」「独創性」などの5項目に関して、新卒社員の出身大学のイメージ調査を実施した結果、本学は全国総合ランキング第6位にランクされ、日本経済新聞(平成26年6月16日17面)に掲載されました。

調査は、全上場企業3,540社を対象にインターネットで実施されたものです。

本学は国公立大学出身者の評価が低かったコミュニケーション能力や主体性の高さなどで高得点を獲得し、「創造力がある」の評価は全国1位でした。

# 涓水会クリアファイルを作成しました

徳島師範期成学校開校以来、様々な改革を経て総合科学部となっている母校ですが、涓水会も卒業生である正会員や在校生からなる学生会員、総合科学部の教職員などの特別会員、また物故者も数えますと2万5千人をこえる組織となりました。この度、正会員だけでなく学生会員等にも使っただけやすい、オリジナルクリアファイルを理事の河崎良行名誉教授のデザインで作成いたしました。涓水会の会員である証として、お使いいただければ幸いです。

ご希望の方には1枚100円(送料別)でお分けしています。購入ご希望の方は、まずはお電話・FAX、またはE-mailにて涓水会事務局にお申し込みください。



## 編集後記

◆涓水会々報第43号をお届けします。ご寄稿くださいました皆様には厚く御礼申し上げます。表紙は正に明日からパリで個展を開催される新進気鋭の美浪恵利氏の作品で飾らせていただきました。また作家としての心情を合わせてご寄稿いただきました。巻頭言としては石井 博 涓水会新会長のご挨拶をいただきました。次いでTopicsとして開学140周年記念の彫刻「水の調べ」の作者である鎌田邦宏先生に作品作成の経緯や思いをご寄稿いただきました。恒例の「総合科学部では今」として石川 榮作前学部長に常三島けやきホール竣工にまつわる話題を提供していただきました。

次に新連載「私の職場」の特集を4名の方々に執筆いただきました。同時に新連載の「進路通信～求人票を送ってください～」を桑原恵就職委員長に記していただきました。次いで永年に亘る研究成果を濱田治良名誉教授に執筆いただきました。また、連載のLet's sportsとして中野太洋氏に投稿いただきました。そして好評の連載「感動が人間を育てる」を石川榮作前学部長に記載いただきました。また「総科のおたから(其の弐)」を掲載いたしました。「スタートライン」として5名の方々、「エッセイ」として2名の方々に投稿していただきました。「助成事業の報告」は4件でした。広報委員会では会員の皆様からの色々な内容のご寄稿をお待ちしています。(10月1日:J)

- ◆編集会議の後、総合科学部構内でヤモリに遭遇しました。本学部や涓水会も末永く守ってくれることを。(U3)
- ◆教育学部から総合科学部へ、そして、……へ。常三島キャンパス全体がさらなる飛躍への転換期にさしかかっていると感じる今日この頃です。(か)
- ◆ユウカリの木に小さな花が咲いているのを見つけました。慣れ親しんだはずの母校には、まだまだ知らない魅力がいっぱい。これからどんどんご紹介していきます!(ね)
- ◆会報は青春のアルバム、年に一度の出会い!!(Y)



色づき始めたキャンパスの樺並木  
(2014年10月23日撮影)



ユーカリの花  
(2014年7月 総合科学部キャンパスにて)